

JAPAN URBAN DESIGN
INSTITUTE

都市環境デザイン会議

東京都文京区本郷2-35-10
本郷瀬川ビル 〒113-0033
TELEPHONE 03-3812-6664
FACSIMILE 03-3812-6828

JUDI 101

20.NOVEMBER
2009

特集 「ライフスタイルと都市環境デザイン」

発行者:都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

●特集:「ライフスタイルと都市環境デザイン」	
特集にあたって……………	1
1. ドイツの豊かな生活と都市環境デザイン……………	2
2. スウェーデンのライフスタイルと都市環境デザイン……………	5
3. 琉球のライフスタイルと都市環境デザイン……………	8
4. 金沢におけるライフスタイルと都市環境デザイン……………	12
5. 港北ニュータウンのライフスタイル……………	15
6. 「まちのクラブ活動」というコミュニケーション装置……………	20
7. 大崎広域圏の生活文化軸と近代化遺産……………	23
8. 湘南ライフスタイルと都市環境デザイン……………	25
●ブロック活動報告……………	29
●事務局より……………	32

特集にあたって

作山 康

SAKUYAMA YASUSHI

都市環境研究所

代表幹事 広報委員

「ライフスタイルと都市環境デザイン」

画一的な計画論やハード整備でできた都市は同じテイストやライフスタイルとなるのだろうか。もちろん答えは否である。狭い日本といえども、風土も異なり歴史・文化の厚みも異なり、そしてそれらを背景とした人々の価値観が異なっているから、当然ライフスタイルも違うし、その結果として生まれる生活風景も異なってくる。しかし、新幹線駅やハウスメーカーの戸建て住宅の風景ばかり、道路や公園さえもややもすると画一的な製品による暴力的な風景が、ライフスタイルとは関係なしに出現しているのも事実であろう。そして、利便性などの機能の充実に重点が置かれていた事も影響し、それが当たり前の感覚となり、なぜいけないのか、なぜ調和していないのかさえも鈍感になってはいまいか。国際的に見ても経済的には豊かでも、生活空間の質が貧しい我が国の問題を、ライフスタイルの側面からその問題点をみつけてみたい。

歴史的都市や自然が豊かな景勝都市においては、古くから人間は自然との調和を意識した住まい方や都市文化を形成してきたため、それらの資源を活用した都市環境デザインが比較的实现されやすい。一方、一般の普通の市街地ではどうであろうか。多くは、そこにアイデンティティを見いだすことができず、個人又はサークルとしてのライフスタイルを楽しむことは可能でも、特定エリアの群としての同様な価値観を持つ地域を形成するのは難しい。向こう三軒両隣などは、景観的視点からは最も小さな群の単位かも知れない。景観資源のよりどころに乏しい所では、地域の資源や文化を頼りに、今の時代に適したライフスタイルを提案し、地域に適した空間像のあり方を探っているところもある。今回紹介できなかったが、「つくばスタイル」など、ニュータウンにおけるライフスタイルを提案し、ハードばかりでなくソフト面からのまちづくり注目している事例が増えつつある。同じつくばエクスプレス沿線の柏の葉地区では、

柏の葉スタイルと称して、新しい郊外市街地の生活スタイルを探りながら、秋葉原や筑波との生活の違いを明確にして都市戦略を打ち出している。

もちろん、ライフスタイルを一つでくれる場合もあるし、各年代のライフステージに応じたライフスタイルの違いもある。このような多様なライフスタイルを選択できる時代にあつて、自然や風土に適した心豊かな生活を営むための人間らしい生活スタイルへの回帰や、低炭素化社会に向けた社会的義務としての生活スタイルの修正がおこなわれつつある。環境問題を背景に生まれたLOHAS (Lifestyles of Health and Sustainability) のような健康や環境を重視した新しい価値観とライフスタイル、スローフード・スロータウンといった取り組みもその一つであろう。

今回は、幸福度で上位に位置づけられる北欧などの海外都市事例と、国内においても昔から当たり前のように取り組んでいた琉球をはじめとする生活と風景との関係性の事例、都市部や地方部、郊外都市部など、それぞれの特性に応じたライフスタイルと都市環境デザインを取り上げてみた。

良好な都市環境デザインを保全・創出・維持していくためには、そこに暮らす人々の価値観、などをベースとした地域独自の「生活スタイル」との関係性を解く必要があるようである。

地域を知ることはその風土や文化や人々の営み・価値観を知ることである。しかし、この人々の価値観が画一化しつつあることで、地域独自の文化や気質を忘れがちになっていまいか、もう一度地域のDNAを奮い立たせることが必要と考えさせられる。

ドイツの豊かな生活と都市環境デザイン

服部 圭郎

HATTORI KEIRO

ドルトムント工科大学客員教授

勤務する大学からサバティカルをもらい、今年の4月からドイツのデュッセルドルフで生活をしている。そういうこともあってか、今回「ドイツの豊かな生活と都市環境デザイン」というお題でJUDIの原稿依頼をいただいた。光栄なことではあるが、ドイツに半年も住んでいない身で、ドイツの豊かな生活を語れる資格があるかどうか不明である。そもそも、ドイツでの生活が豊かであるかどうかさえ確信が持てない。消費者という立場であれば、間違いなく東京の方がデュッセルドルフよりは遙かに豊かである。デュッセルドルフの商店は日曜日には閉まるし、平日の営業時間も短い。品揃えは悪いし、サービスはないに等しい。13時30分に窓口を閉める保険会社もある。行政サービスといった観点からも、日本の「お役所仕事」と評判が悪い日本の公務員の方が遙かに優れたサービスを提供していると思われる。電車は日本では考えられないくらい頻繁に遅れる。自動販売機は日本のものとは比較にならないくらい発券に時間と手間がかかり、しかも大きなお札は受け入れてくれない。たまに受け入れてくる機械があったりするが、お釣りはコインで返ってくるのでこれはこれで大変だ。街中に公衆トイレは少なく、あっても有料であり、手持ちにコインがないと苦しい思いをして両替に走らなくてはならない。このような生活を日々続けていると、ドイツの豊かな生活とは何なのだろうかと悩んでしまう。

など書いていながら、実は、ドイツの豊かな生活とは何であるかの解答は用意している。それはJUDIの原稿としてはベタすぎる解答だが、ずばり都市環境デザインが優れているということである。都市環境デザインが優れているというのは、公共性の豊かさが確保できているということだ。上述した個人的な「私」の豊かさを犠牲にしても、公共性の豊かさを向上させている。それが、日本の都市ではなかなか得ることができない、都市空間の豊かさ、環境デザインの豊かさをもたらししていると考えられる。以下、具体的にどのようなところが優れているのかを説明したい。

まず、公共的な空間の豊かさが挙げられる。

写真1は筆者の住んでいるフラットのコートヤードである。このコートヤードは一階の住民が所有しているので足を踏み入れることはできないが、日々、その景観とスペースを楽しむことはできる。バルコニーの価値がドイツに来て初めて理解できた。ゆったりとコートヤードを楽しむには家の中ではなく、バルコニーの方が断然勝れているからだ。このコートヤードなどは正式な公共空間ではないが、この区画の住民はその空間の豊かさを共有することができている。そして、一階の住民達はそのコートヤードを所有するという権利と引き替えに、しっかりと管理することで上階の住民にも便益を還元してくれている。その事実だけで、隣人との信頼関係が生まれている。

そして、定義としての公共空間も豊かである。公園や道路空間、広場、河川敷などの公共用地の空間がデザインといった質の面でも、空間的な量の面でも非常に贅沢につくられている。広場に関しては、敢えて私がいまさら指摘する必要もないだろうが、ヨーロッパにおいて民主主義的概念が形成されるうえで重要な役割を果たし、今でも都市のアイデンティティの源である。したがって、その広場の持つ重要性は日本の都市計画的につくられた広場とは比較もできないのだが、やはり素晴らしい。広場を訪れれば、その都市が理解できるような錯覚を覚えるくらい、それは都市の「公共性」の象徴であり、その都市の個性を発現させている。ドイツの都市の場合、その大小に関わらず、広場は自動車が乗り入れ禁止されており人間が主人公の空間となっていることも、そのアメニティの質を高めている。夏の夕暮れ時に、この広場のオープン・カフェでビールを飲んでみると、「豊かだな」と思わずにはいられない。例え、つまみの焦げた油まみれのジャーマン・ポテトが、日本の居酒屋の枝豆に比べて遙かに味が劣っていても、広場という素晴らしい空間体験をしているだけで豊かさを感じてしまう。

アクセスという点からの公共性も優れている。筆者の家からは歩いて5分以内に6系統の路面電車、地下鉄が走っている。頻度は地下鉄が5



写真1：拙宅のバルコニーからコートヤードを望む

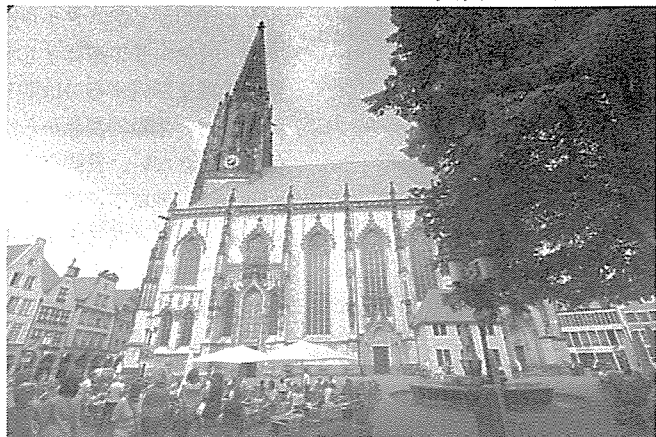


写真2 ミュンスターの広場にあるオープン・カフェ

分に1本、路面電車は10分に1本なのでサービスはそれほどよくはないが、これにバスも加われば市内のどこでも公共交通のネットワークだけで移動できてしまう。運賃は一番短い距離で1.4ユーロと決して安くはないが、1ヶ月券が60ユーロ弱(7500円くらい)なので、これを買ってしまえば市内ならどこでも自由に移動できて便利である。ドイツで生活するうえでは当初は自動車を買わなければと考えていたのだが、公共交通が便利なのと路上駐車をするのが大変なので買うのをやめてしまった。しかし、結果、まったく問題なく過ごせている。

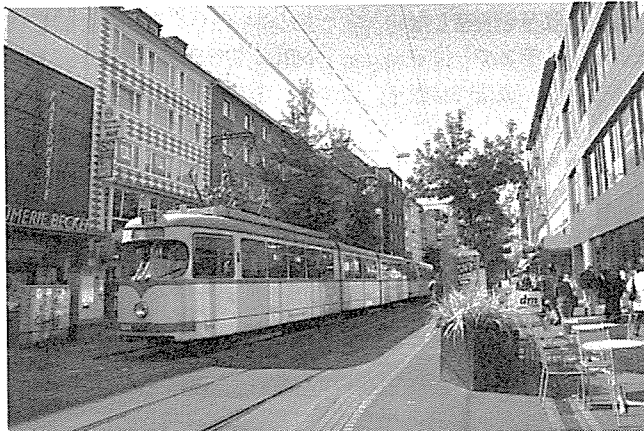


写真3. 頻度は今ひとつだがネットワーク密度は高いデュッセルドルフの公共交通

そして、商店街が充実していることも有り難い。筆者は、商店街は極めて公共性が高いと考えるものであるが、デュッセルドルフではこの準公共財の提供するサービス享受した豊かな生活を送ることが出来ている。もちろん、このような商店街が充実していることは、日本のように高いレベルで流通業が発達していないことの裏返しであるとも考えられるが、結果として、スーパーで売られるナショナル・チェーンのブランドではない多彩な商品(例えば、自家製ピクルスや自家製パン)を得ることができている。

このような商店で売られているものはあつという間に腐ってしまい、日本の保存料の凄さを改めて知って、感心したり恐ろしいと思ったりもするが、幸い、大学の仕事も忙しくないので、頻繁に商店街に行くことでこの問題に対応でき

ている。歩いて商店街に買い物をしつつ思うのは、自動車ですーパーに買いに行くことの貧しさである。筆者は日本でも住む場所を商店街で選ぶくらいなので、ドイツにおいて充実した商店街が家のそばにあったことは喜ばしいことであつた(ただし、これはデュッセルドルフの特殊解であると指摘するドイツ人の同僚もいる)。

このような公共性を重視するというドイツの考え方は、最近の都市開発や地域開発においても踏襲されている。その例として、3点ほど紹介したいと思う。まず、大学の周辺地域で1988年から10年間の期間限定で行われたIBAエムシャーパーク事業。この事業は、ヨーロッパを代表する工業地帯であつたルール地方の産業跡地等を、産業構造変化に対応して新たな利用に転用させるための120以上のプロジェクトから構成されるが、その多くが公園、緑地、文化施設など公共的な用途のものとなった。住宅も多く開発されたが、それらは賃貸であつても住民参加方式で設計が行われ、また低所得層でも入居できるよう社会住宅としてつくられたものが多かった。一部、サイエンスパークやオフィス、商業施設へと転用したものもあるが、その割合は少ない。マーケットがなかったのではないかと、という意地悪な味方もできないわけではないが、それまで公共性とまったく縁遠かつた製鉄所や炭鉱が人々に開放された意義は大きいと思われる。

2点目はデュッセルドルフのライン川沿いの道路の地下化事業とその地上部に整備したライン河畔プロムナード事業を紹介したい。デュッセルドルフでは増加する自動車交通を処理するために、第二次世界大戦後に連邦道路1号線をライン川沿いに新たに敷設する。日本の都市が都市高速道路を河川の上部空間に整備したようなことをしたのである。そして、その結果、旧市街とライン川は分断され、また多くの自動車がここを走行したために騒音や排気ガスの問題も生じることになった。これらを解決させ、ウォーターフロントを再び人々に取り戻すために、デュッセルドルフ市はこの連邦道路1

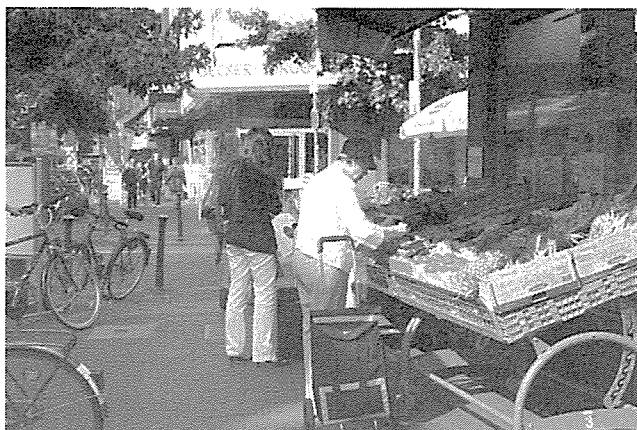


写真4. 家のそばの商店街。ちなみにコンビニはありません。

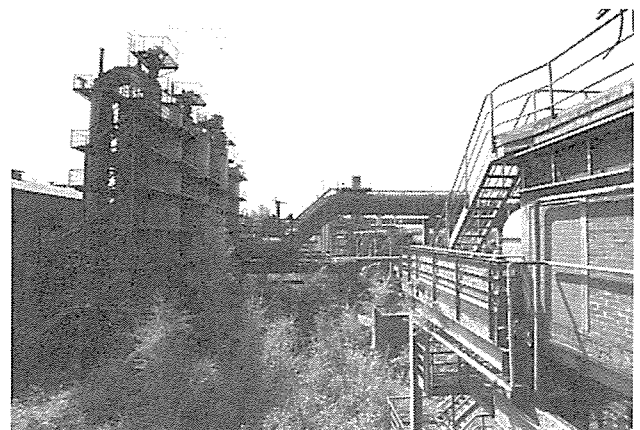


写真5 デュースブルクのテュッセン高炉跡地は公共のランドスケープ・パークに転用された。公共なので無料。年間70万人を集客する。

号線を地下化させ、地表部分をプロムナードとして整備することを計画し、1989年からその事業に取り組み始めた。道路の地下化は1993年に完成し、旧市街地のウォーターフロント沿いのプロムナードも1995年に整備された。現在、このプロムナードは約2キロメートルに及び、600本にも及ぶプラタナスの並木が植えられており、多くの人々が散策やサイクリングを楽しんでいる。このプロジェクトは1998年にドイツ都市計画賞を受賞している。

3点目としては、最近ドイツで徐々にではあるが注目を浴びつつある自動車不要コミュニティを紹介したい。これは、自動車を所有しない人のためにつくられたコミュニティで、住宅周りから自動車を排除することで、道幅は自動車が行き通じないため狭くすることができている。そして、その空間は人々が自由に、自動車に邪魔されずに使っている。特に、子供達の遊び場としての道路が復活している。自動車を代替する交通機関としては自転車が使われており、駐車場はないが駐輪場は必需である。このようなコミュニティはケルン、ハンブルク、ミュンスターなどで実現されているが、そこで生活している住民やその実現に奔走したフィクサーなどの話を総合すると、この自動車不要コミュニティの最大の売りは、自動車を利用しないことではなく（住民に自動車嫌いはそれほど多くない）、自動車が存在しない生活環境だそうである。そして、自動車がないことによって生じるコミュニティ性、公共性が他の住宅地とは差別化できる魅力であると言う。筆者もケルン、ミュンスターの事例を訪れたが、子供の頃、東京の近郊

に多くあった団地群と似たような敷地計画であることに興味深く感じた。思えば、日本では農村コミュニティを例に出すまでもなく公共性をしっかりと有していた。しかし、それに個人主義が蚕食していき、またそれを標榜するアメリカ型の社会を追従していくうちに、ヨーロッパよりも公共性を蔑ろにするようになってしまったのではないだろうか。都市のアメニティとは社会の共通資本であることが、ドイツで暮らしていると実感される。

ドイツで生活して半年に満たないが、ドイツから日本をみると、公共交通の充実、商店街の賑わい、子供の遊び場としての路地、青山団地・阿佐ヶ谷団地等にみられる建物間の豊かな空間等、日本の都市が従来有していた公共性の高さを再確認すると同時に、それらを放棄して個人主義的な価値観に基づく都市づくりに邁進していることの危険性を知る。JUDIの諸先輩方が読まれることを考えると、このようなことを書くのは極めて不遜ではあるが、都市の魅力を生み出すのは公共性の豊かさである。その公共性の豊かさをつくるのが都市デザインであることを考えると、我が国の経済的な豊かさに比して、生活が貧困なのは、この都市デザインがしっかりと機能できていない状況にあるのではないかと、と誠に勝手ながらドイツの都市の豊かさに触れつつ考えていたりする。消費的な豊かさ、株価に反映する豊かさ以外の豊かさがあることを、改めてJUDIのような組織が社会に発信することの重要性を偲びながら考える次第である。

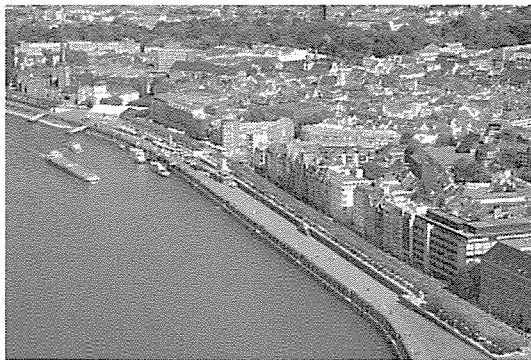


写真6 河川へのアクセスが再び確保された



写真8 地下化された道路が地上に出るところ



写真7 多くの人々が河畔のプロムナードでくつろいでいる



写真9 ケルンの自動車不要コミュニティ「シュテルヴェルク60」

スウェンボーのライフスタイルと都市環境デザイン

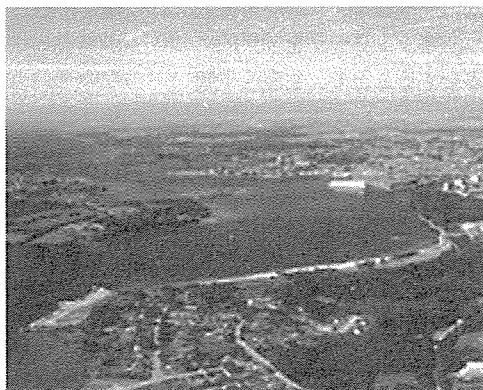
水津 陽子
SUIZU YOKO

合同会社フォーティ R&C

2006年、世界幸福度ランキングで世界一になったデンマーク。そのデンマークで、高福祉都市として、ベスト・オブ・ザ・シティを受賞。近年、首都コペンハーゲンから、大量の移住者を集めている都市があると知り、2007年6月デンマークに向かった。聞けば、その都市は、その年の1月、デンマークが漸行した「地方自治制度」の大改革の中で、新たな公共のリーダーシップ、自治体におけるバリュー経営を実現し、高い評価を得ているという。

首都コペンハーゲンから160km、南フン島の南部、アーキペラゴ(群島)の都と称される美しい港町。スウェンボーは人口わずか58,000人の地方都市だ。デンマークに98ある自治体の中でも、決して大きな都市ではない。そこで、最先端の社会福祉、まちづくりが実現されているという。スウェンボー市の協力を得て、その取り組みを取材させてもらった。

デンマークは、EUが掲げるビジョン「世界で最も競争力があり、最もダイナミックな知識集約型の経済を持つ地域が、より多くの雇用と強固な社会的結束を持ち、持続可能な経済成長」の実現において、2006年、EU25カ国中、第一位に輝いた。「北欧スタイル」というと、ゆったりしたスローライフのイメージがあるが、それが実現できるのも、高い生産性と競争力があってこそ、デンマークはそれを国家的に実践し、成果を挙げていた。



■北欧社会の価値観とバリュー

スウェンボー市は、2007年1月、周辺の2つの都市と合併し、新市スウェンボーになった。合併にあたり、規模、文化・歴史が異なる3つの都市は、合意形成を行った。それが新たな「公共のリーダーシップ」であり、新市経営の基礎となる共通のバリューだった。掲げたのは「ホリスティックな問題解決」そして「市民志向の自治体」、その質を高めるための「学習と開発」、「幸福と健康」の4つだ。

新市の経営は、このバリューを基礎として、思考され、行動、検証される。デンマークでは、ユーザー・デモクラシー(利用者民主主義)が浸透しており、まちづくりなどの政策形成には、市民パネルが活用される。

また、北欧社会の価値観、共通認識として、

ノーマライゼーション(様々な違いを受け入れる社会こそが正常である、という多様性の許容)や、高齢者三原則として、①環境の継続性、②自己資源の活用、③自己決定権の考え方がある。

■北欧デンマークのライフスタイル

スウェンボーの取材をサポートしてくれた市の担当者、マーチン・フィッシャーは、滞在中、彼と彼の両親の家それぞれにホームステイさせてくれた。彼の父はすでにリタイアしており、海を目の前にした広い庭を有す邸宅で、夫婦二人で暮らしていた。

マーチンは、夕方5時に、市役所を出ると、保育園に二人の子どもを迎えに行き、戻ると家の前の海で、子どもたちを水浴びさせた。彼の父は、客のためにバーベキューを用意してくれ、母はキッチンから、様々な果樹が植えられた芝生の庭を下り、サラダやパンやジュースをのせたお盆を抱えてやってくる。まるで、映画のワンシーンのようだ。

わいわいやっている、隣の住人が、手紙を持って、庭越しに顔をのぞかせる。近く予定されている夏至祭りのお知らせらしい。食卓の前には、美しい海があり、遠くを行き交う大小の船が見える。聞こえてくるのは、岸に寄せる小さな波の音だけ。でも、だからといって、これがスウェンボーの特別幸福な人の暮らしというわけではないようだ。

というのも、マーチン自身の家に泊めてもらった時、最近購入したばかりの中古の家は、合間を見て自分たちで少しずつリフォームしているというものだったが、十分な広さと設備を有していた。もちろん、庭つきで、バトミントンくらいなら、親子で楽しめる広さがある。その上、家の裏には、家庭菜園などもできる裏庭があった。彼自身は、日本に留学していたこともあり、デンマークに戻り、スウェンボー市に現在の国際業務のプレゼンをし、自らのポジションを得たばかり。夫婦は共働きだが、保育園に通う子どもも二人いる。それでも、若い夫婦が、自分たちの家を手に入れることができる。それがスウェンボーの暮らしだ。

また、スウェンボーから船で1時間、再生可能なエネルギーアイランド「エーロ島」では、屋根も抜け落ちたお化け屋敷を数年かけて夫婦や友人でリフォームしたという家を見せてもらった。こうしたリフォームは、デンマークでは一般的なようだ。

■ワークプレスとワークスタイル

スウェンボー訪問初日、私が最も驚いたことは、夕方5時に、市庁舎から一斉に人の姿が消えたことだった。市の社会福祉の担当者のインタビューが、10分ほど時間オーバーし、部屋を出ようとした私は、一瞬、目を疑った。オフィスはすでに消灯され、人っ子一人いない。また、入口は施錠され、外に出られない状態になって

いた。なんたる早技。

それでいて、2005 年、国民一人当たりの GDP は、デンマークの世界第 6 位に対し、日本は 15 位。はるかに低い数字だ。彼らは、どうやって、この高い生産性を実現しているのか。

働き方については、ヨーロッパのベストワークプレイス 100 にも選ばれた「Kjaer(ケア)」という民間企業でも、その先進的なワークプレイスとワークスタイルを見せてもらった。

ワークプレイスでは、北欧ならではの開放的な空間デザイン、人間工学にもとづいた機能的な設備が目につく。可動式の机は、立って仕事することにも対応している。

また、優秀な人材を確保するためワークライフバランス(仕事と私生活の調和、やりがいのある仕事と充実した私生活の両立)の取り組みに関しては、非常に手厚い支援を行っていた。そこで働く社員の満足度には、非常に高いものが見られた。彼らにとって、家族や自分の時間は、人生の充実度、満足度にとって、とても重要であり、優秀な人材であれば、あるほど、それを実現できる場所へ移動する。

また、彼らは、短い時間で、最大の成果を生むことに、とても積極的だ。たとえば、障害者福祉の現場では、障害者であっても、個々が有している能力を発揮させ、活躍の場を与える支援に重点を置いている。そのため、スタッフは、障害者の自主性を重視し、彼らのチャレンジを成功させるため、互いの知識やノウハウを提供しあい、協力し合う。ネットワークを効果的に使い、協力して仕事することで、生産性や競争力を高め、最終的には、互いに大きな利益を得る。その合理性と戦略性には学ぶところが大きい。

■大量移住を呼び込んだ理由

スウェンボーへの首都コペンハーゲンからの大量移住は、デンマーク国内でも大きな話題となっていた。2005 年、コペンハーゲン・ビジネススクールは「デンマークにおけるクリエイティブ・クラスの分布と分析」という調査報告を発表。その中で、創造的な仕事に携わる人口が多い都市として、首都コペンハーゲンと第二の都市オーフス市のほかに、地方都市の中からスウェンボー市の名を挙げ、同市は一躍注目を集めることになった。その注目度は、デンマークの全国紙で特集が組まれるほどで、私はその記事を書いたジャーナリストにも取材し、話を聞いた。

何故、彼らはスウェンボーを選んだのか。一つに地理的要因が挙げられた。首都コペンハーゲンがあるシェラン島と南フュン島の間に橋が出来て、二時間ちょっとで行き来ができるようになり、日帰りが可能になった。第二にインターネットの普及がある。クリエイティブ・クラスと呼ばれる人たちは、主に三種類。建築家や

コンサルタントのような専門家、アーティストなどのクリエイター、そして、社会変革者たる起業家たち。彼らのような仕事に携わる人たちは、必ずしも、オフィスに縛られて仕事をする必要がない。また、第三の理由として挙げられたのが、ワークライフバランスだった。

実際にスウェンボーに移住した人たちのネットワーク、GE9 のリーダーに話を聞いた。GE9 はすでに 60 人の移住者ネットワークとなっており、スウェンボー市の経済や産業政策にも影響を与え始めていた。テレビプロデューサーとジャーナリストの二人の女性は、それぞれ赤ちゃんを抱いて、オフィスに現れた。

彼女たちは、こう話した。「必要な時に、コペンハーゲンに行き、それ以外は、豊かな自然、充実した福祉や保育サービスの中で、家族や自分のための時間を大切にする生活をしたい」そんな暮らしを求めた時、スウェンボーはとても魅力的だったという。

また、もう一つの理由として、GE9 の存在そのものが挙げられる。最初に、スウェンボーに移住したテレビプロデューサーの女性が、情報発信力を持っていて、次々と、移住者を呼び寄せた。全国紙で取り上げられてからは、加速度的に移住者は増えているというが、クリエイティブたちにとって、知的刺激というものはとても重要だ。クリエイティブな人たちが集まっている地域では、都市にいるのと同じような知的刺激を得ることが可能だからだ。そういう人たちが集まっているまちの付加価値は決して小さくない。

■三原則に基づいた「介護付き高齢者住宅」



スウェンボー市の高齢者福祉は、高齢者福祉の三原則が貫かれている。自己決定権に基づき、高齢者が自宅で過ごすという継続性を願えば、そこで出来る限り、その人の持つ機能を生かした福祉が提供される。スウェンボーはセントラルキッチンが充実しており、食事の配達サービスも、その介護度に応じたメニューが用意されている。流動食しか受け付けない人には、専用の食事もあった。

私もごちそうになったが、このセントラルキッチンの食事は、レストラン並みにおいしかった。食事は空腹を満たすためのみにあるのではない。食事という楽しみも、生きる楽しみの一つだし、そこに人としての尊厳、幸福を重視し

た福祉の一端が見えた。

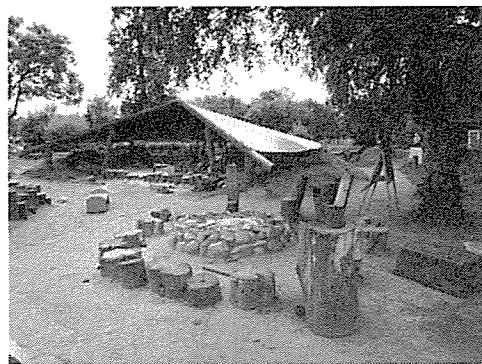
介護付きの住宅は、一人ひとりのニーズに合わせて、様々なタイプがある。写真は、見学させて頂いた「ブリュグフーセット」という介護付き高齢者住宅だが、建物も敷地も、広々とした空間が広がる。通路は車椅子がすれ違えるくらいの広さがあり、介護施設というより、リゾートホテルのようだった。外側の手すりには、数メートルおきに花のプランターが置かれ、デンマークのフラッグカラーの赤色の花と葉の緑が通路を彩っていた。

各部屋のドアには、ガラスがはめられている。カーテンを開けば、外を見ることもできるし、誰かが通りかかれば、声をかけることもできる。人に会いたくなければ、カーテンを閉めておけばいい。窓も大きくとられ、ドアを開かないまま、窓越しに会話することもできる。

室内は、もちろんバリアフリーだ。バストイレへの移動も一人で容易にできる。何かあれば、24時間体制で、スタッフが駆けつけてくれるし、希望すれば、隣接する施設でデイケアサービスを利用することもできる。施設には、スポーツジム並みの健康器具が整備され、体力づくりをすることもできる。

印象的だったのは、高齢者施設に限らず、障害者が働くカフェなども含めて、福祉施設の色づかいがとてもビビットで明るかったことだ。この色がもたらす心理的効果も見逃せない。それだけで、とても心も明るくなり、優しい気持ちになる気がした。

■森の保育園



北欧における自然享受権という考え方は、たとえ、私有地であっても、一定範囲で自然を享受する権利が誰にでも認められるというものだ。たとえば、他人の敷地に立ち入り、そこに咲く花や果実を摘んで楽しんだり、寝転がったりすることも許されるという。

森の保育園は、他の北欧諸国にも多くみられるものだが、ここでは、子どもたちは野外で遊ぶ。通常、森の保育園では、雨や雪の日でも、乳母車に入れられた生後間もない赤ちゃんまでが、野外に置かれると聞いていたが、実際に見た時は、やはり、驚いた。

子供たちは、園内や近くの森や海などにも出かけ、自然と遊び、自然に学び、自然への愛着

を持ち、自然のルールを身につけて育つ。スヴェンボーの幼児教育の理念は、「子どもが、一人の人間として自分らしくあるための強さを養う」ことにある。ゆえに、保育の内容も、子供たち自身が決める。

自然と触れ合うことで、子どもの身体の発育や主体性を育むため、こうした自然教育法を取り入れている。こうしたことは、その後の教育システムにも受け継がれている。前出のコペンハーゲン・ビジネススクールのレポートでも、スヴェンボー市の教育・知識に関する社会環境が国内でも優れていることが示されている。

■スローなまちの新たな開発計画

もともとスヴェンボーは、造船業が盛んな重工業のまちとして発展してきた。それがグローバル経済の中で衰退し、転換を迫られた。新たにスヴェンボーが打ち出したのが、観光や外からの投資を呼び込む新たなまちの開発計画だ。

まず、観光に関しては、イタリア発祥のスローシティ認証「チッタ・スロー」で、デンマーク国内で初めて認定を受けた。チッタ・スローは、地方中小都市の生活・文化・歴史を再評価し、スローな生活と環境を尊重して、人間らしく誇りを持って田舎で生活して行なうという運動だ。イタリアに留まらず、ヨーロッパを中心に、世界の約100都市が加盟している。

また、クリエイティブたちの大量移住に関しても、市は、現在の市街地の西側にある「思慮深い森」といわれる自然豊かな地域を新たにクリエイティブたちのまちとして開発する計画を打ち出している。新たなまちは、美しい自然と共生し、環境にも配慮された住宅、サイクリングロードや教育・福祉施設、アミューズメントなどのコミュニティゾーン、ビジネスゾーンなどの機能を配したまちとなる予定だ。今後25年の間に、新たな住民7,000人を呼び込む計画となっている。

また、元造船所の跡地活用についても現在、開発計画が検討されており、ここに新たな投資を呼び込みたいとしている。同市は、日本市場における同市が有する福祉ソフトの提供や観光誘致などのため、毎年一回、担当者を日本に送りこんでいる。人口わずか5万の地方都市がグローバル戦略を持っていることは、海外では当たり前のことなのだろうか。マーチン・フィッシャーは、日本の漫画家などとの文化交流にも可能性を感じているという。来年に向けては、同市が持つ福祉や教育のソフトと日本の漫画・アニメのコラボレーションの話も出ており、新たなビジネスへの発展も感じさせる。

■スヴェンボー情報レポート

<http://svendborg.sblo.jp/>

本レポートで紹介できなかった映像資料、継続的なスヴェンボーの情報等は、こちらでご提供しています。

琉球のライフスタイルと都市環境デザイン

前原 信達

MAEHARA NOBUTATSU
 (株)都市科学政策研究所

■はじめに

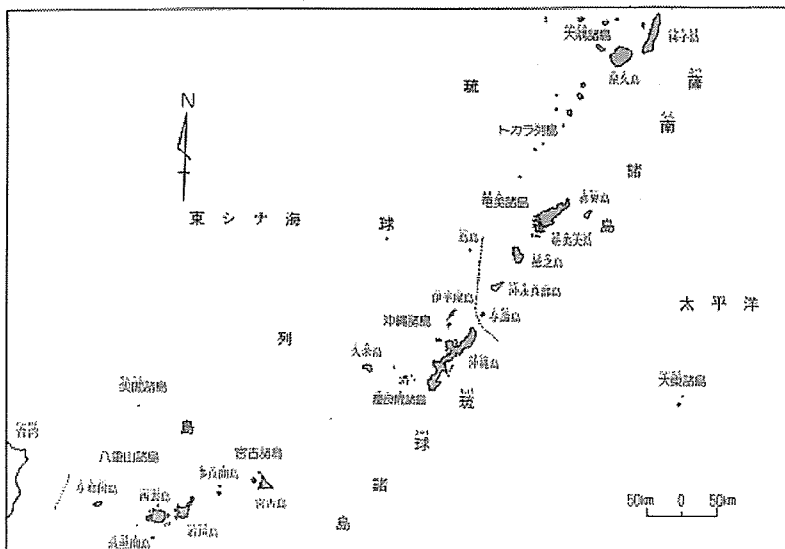
“沖縄”とか“琉球”とか言う場合、県外の方はどのようなイメージを持つのだろうか。珊瑚礁の海、亜熱帯のカラフルな植物、台風、基地の島、エイサー、足てびち等々。

琉球は沖縄の別称とされるが“琉球”には奄美諸島を含むかつての琉球王国を構成した島々が想起され、必ずしも沖縄とイコールのイメージではない。このため琉球ブロックでは敢えて琉球という言葉を使っている。

そして、“沖縄”であるが、これもまた県民意識としては微妙である。沖縄本島に住む人が八重山石垣島に出かけた。地元の人から「沖縄から来たのですか」と言われて、一瞬???（ここは沖縄ではないのか?）となるのは私一人だけではない。さらに、沖縄本島人にカルチャーショックを与えた石垣島住人が与那国島に出かけた際に、「八重山から来たのですか」と聞かれて逆に深いカルチャーショックを受けて帰るはめになる。

再認識しないといけないのは、沖縄が東西 1,000 km、南北 400 kmにわたる海域に点在する島々からなる島しょ地域であり、島々はそれぞれが強い独自性ある生活文化・慣習・言葉等を持っていることである。一括りにはできない沖縄がある。したがって、那覇だけに住んでいると本当の沖縄は見えてこない。そのことに気づき、離島にできるだけ足繁く通い多くのことを島々から学ばせていただいた。

<島しょ沖縄の広がり>現在の沖縄県は東西 1,000 km、南北 400 kmにわたる海域に点在する島々からなる。奄美諸島までを含めると南北 500 kmにおよぶ



<クサティ森>集落から市街地に拡大した今でも、クサティ森は地域の安全・安心・快適性を支える大切な基盤となっている。



■生存のためのデザイン

今でこそ豊かな自然、亜熱帯のリゾート沖縄がPRされているが、戦前までの沖縄では、湿润亜熱帯の風土は、暴風・干ばつ等が常襲する厳しい自然でもあった。そのような風土の中で、小さな島々の暮らしを成り立たせていくためには、自然の摂理を尊重し自然と共生していくことが大前提であった。

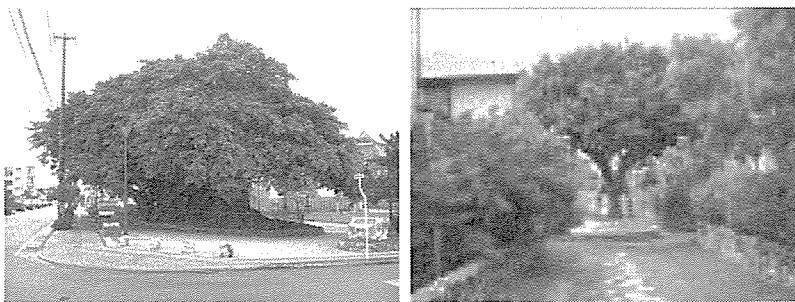
このため、集落はミーニシ（北風）を遮るよう小高いクサティ森を背にして立地し、草分けの地にはムラ全体の安全・豊穡を願う祭祀の舞台装置として神アサギを配した。そして激しい暴風雨から日常の暮らしを守る物理的基盤として集落抱護林や屋敷林を構えた。中には、渡名喜島のように屋敷を道路よりも 1 m程低く掘り下げて家屋を建てた集落もある。強風を遮るための知恵である。

また、水場として村ガー（共同井戸）やヒージャー（樋川）、村人の精神的安心感を維持する装置としての村シーサーや石敢当、さらに集落境界を示すチンマーサー（石囲いの緑陰樹）などが設けられた。これらの生存に関わる知恵と工夫のある風景が今でも集落や離島ではよく見られる。

都市部においてはこのような生存基盤としての風景は大きく変容してきた。戦後、建物のコンクリート化や上水道化が進みもはや集落抱護林や村ガーなどは現在では必要性ない、と思われがちである。しかし、本当にそうだろうか。

屋敷林、生垣、街路樹（つくり方によっては現代の集落抱護林となりうる）をはじめとする緑のネットワークや潤れることのない水場などの重要性は阪神大震災等の経験を通して再評価されており、現在及び将来においてもなくてはならない生存基盤であり続ける。琉球石灰岩が広がる亜熱帯の島しょにおいては、水・緑・風の循環に特に敏感である必要がある。集落抱護林、屋敷林、チンマーサーなどの緑陰樹、村ガー・樋川などは生存に関わるデザインとして捉え、都市・農村にかかわらず積極的に再構築していく観点から保全・回復・創造していくことが今後とも大切と考える。私事ではあるが、いざという時のために、住まいの近くにある樋川の場所を以前から確認している。これを地域共通の認識として共有していくことが生存のためのデザインを活かし継承していく上で重要と考える。

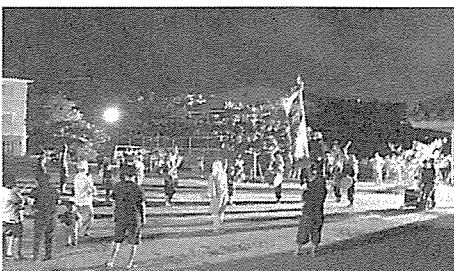
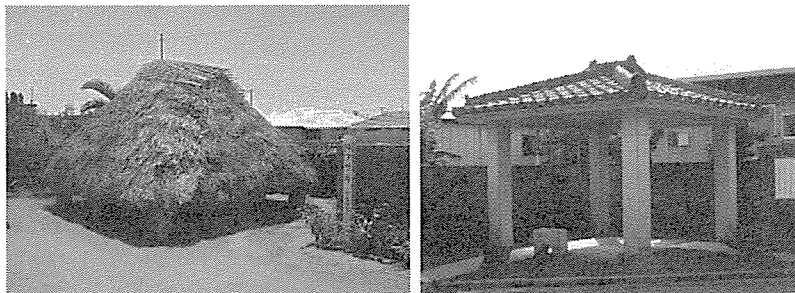
＜チンマーサー＞かつては集落の境界に位置し、人々の休憩、待合いの場等として利用された。新しい街には現代版チンマーサーが意識的に設けられてきている。



＜集落抱擁林と屋敷林＞暴風時に集落の外から内に一步入り込むと、集落抱擁林・屋敷林のありがたさが実感できる。



＜神アサギ＞ 村々において神を招請して祭祀を行う場所。建物は軒が低く四方壁のない茅葺き屋根が本来の姿である。現在では赤瓦葺やコンクリート造のものが多くみられるが、それは変容の許容範囲内と思われる。但し、軒高を公園の東屋のように高くしているものは本来のあり方からするといかなものか。



＜新都心地区での青年エイサーとギネス登録されている那覇大綱曳＞那覇市街地や新しいまちでも伝統的な行事が日常生活の中で脈々と受け継がれている。



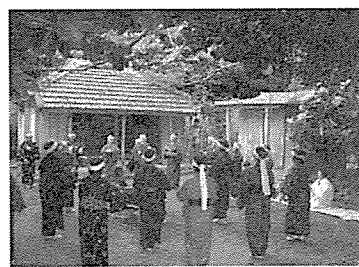
■ハレを彩る精神文化のデザイン

前述した生存基盤としてのデザインの上に、ハレの精神文化を彩る多彩なデザインが花開いている。その代表的な風景が各地の伝統行事やまつりであろう。

普段はなにげなく通り過ぎてしまう普通の道や辻、家々の庭、海浜などが伝統行事やまつりの際にはハレの舞台として浮かび上がる。毎年各地で繰り広げられる豊年祭での綱引きやガーイ（辻での掛け合い）、獅子舞などは地域の決まった通りや辻、広場で行われる。市街地や新都心などの新しいまちでもエイサーや道ジュネーが継承され演じられる。海浜においては、旧暦3月3日の浜下り、梅雨明けを告げる各地のハーリーが繰り広げられ、本島北部では豊作・豊漁祈願のシヌグやウンジャミが、宮古島では津波よけのナーバイ、八重山ではニライ・カナイからの来訪神を迎えるユーンカイ（世迎え）などの行事が執り行われる。

これらの伝統行事やまつりは毎年（中には数年ごとに）決められた日に執り行われ、地域の個性ある風景（地域のデザイン）として変容しながらも日常生活の中で脈々と継承されている。

＜各地の伝統行事・祭事＞集落の通りや辻、アサギ広場、トゥニ（草分けの生地）、海浜などで多彩な伝統行事・祭事が毎年繰り広げられている。



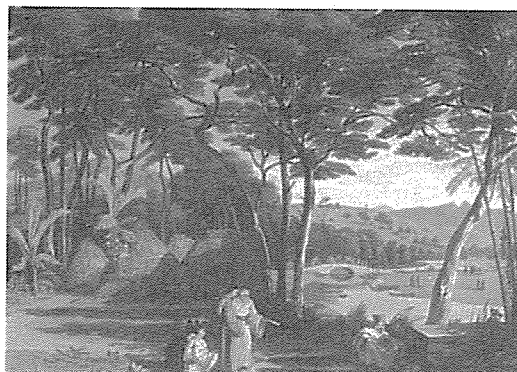
■風格を意識した王都のデザイン

島々で成り立つ沖縄においては、小さな空間を豊かに見せることが特に大切であった。中国からの冊封使や来琉する欧米艦船など、沖縄へやってくる外国の人々に、王都としての風格と奥行き感ある風景を演出し道々で見せ場をつくることは、琉球王国が対外政策の柱として取り入れた戦略的デザインでもあった。国王の居城としての首里城を際立たせ、那覇・首里のまちには他の地域では禁止していた赤瓦葺を推奨し、王府直轄の焼き物の里・壺屋や世界遺産識名園などの庭園を整え、石垣囲いや石畳道が整備された緑豊かな亜熱帯庭園都市を生み出していた。その都市美のすばらしさは、来琉した当時の欧米人等の記録にも記されている。

1855年に著された『スポールディング航海記』には、「緑したたる街並み、見晴らしのよい丘、こんもりと繁る木立、どれをとりあげても首里の都は世界一美しい。……手入れの行き届いた泉で喉の渇きをいやし、雲つく大樹の陰でピクニック気分。……あの伝統の国イギリスでさえこんな古色蒼然たる自然の庭園は持ち合わせていないのだ。」と描写されている。また、戦前昭和の沖縄を訪れた柳宗悦は『沖縄の人文』の中でこう述べている。「日本にある殆ど凡ての城下町を訪ね歩いた吾々に、どの町が最も美しいかを問われる方があるなら、私たちは躊躇(ためら)はず直ぐ答えるでせう。沖縄の首里が第一であると。……自然と人文がかくも美しく組み合わせた光景を、日本のどの土地に見出すことが出来るでせう。さうしてどの都市が首里ほど美しい山水を四囲に控え、夢に満ちた城郭を内に備え、歴史を語る宮殿や寺院や民屋や、人文の凡てをかくもよく保有しているでせう。」

自然と歴史と人文との調和、この良好なバランスを琉球の国は重要視し、都市デザインの価値として表現していた。

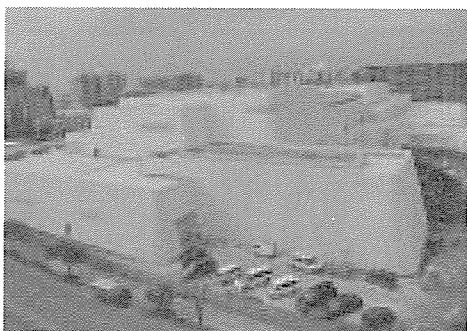
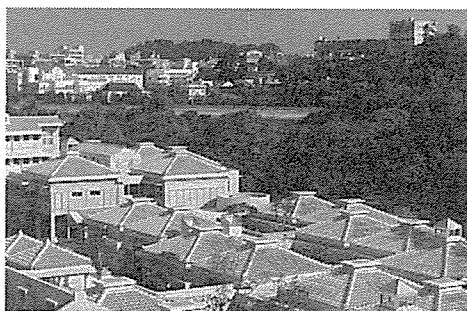
＜「青い目のみた大琉球」より＞山紫水明な泊高橋の遠望、石垣・赤瓦葺・樹木が調和した端正な那覇の街角などが描かれている。



＜壺屋の登り窯とスージ(路地)＞壺屋は1682年に琉球王府の窯業振興の拠点として形成された。今では沖縄の都市観光を支える大切な歴史的地区となっている。



＜城西小学校と県立博物館・美術館＞別棟型の集落形態や石積みグスクなどのデザインが現代建築のモチーフに取り上げられてきた。



■あの世と結ぶこの世のデザイン

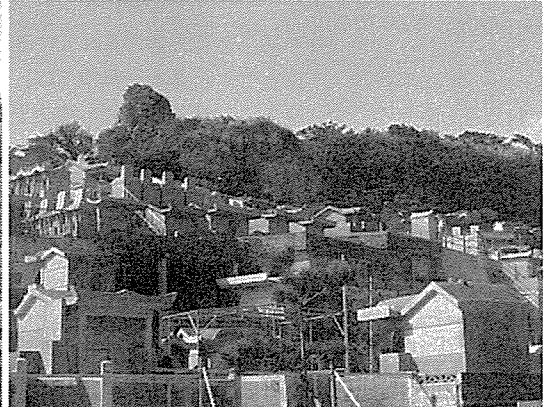
沖縄では丘の中腹、あるいは市街地の中に亀甲墓や家型の破風墓が密集して建てられている風景によく出くわす。墓の形や所有形態は地域・時代によって多様だが、墓は私たちの社会に必要な存在であったし、現在も私たちの暮らしになくてはならない存在である。沖縄では墓は永遠の住処であり、現世の家は仮の宿として認識されてきた。このため沖縄の墓には基本的に入り口(墓口)や庭(墓庭)があり、石垣囲

いやヒンブン（屏風状の塀）などもみられる。
あの世と結ぶこの世のデザインである。

墓のまつりとしては本島中南部で盛んな清明祭、それ以外の地域で行われるジュールクニチー（十六日）などがある。清明祭は現在使われている墓で行うウシーミー（御清明祭）と、一族や遠い祖先がまつられた墓で行うカミウシーミー（神御清明祭）があり、墓前に重箱料理を供えて焼香し、墓庭でごちそうを食べながら久しぶりに揃う親族の親睦を深める場ともなっている。ジュールクニチーもおおむね同様である。

近年は一族が利用する比較的大型の門中墓からより小さな家族墓へと移行が進み、特に都市部では緑のないむき出し状態の家族墓が密集する風景が斜面上に出現するなど、あの世と結ぶこの世のデザインにも、景観上の問題が指摘されてきている。

<都市の中の墳墓>典型的な亀甲墓。清明祭のときにはその墓庭で親戚が集い親睦を深める。一方、緑がないむきだしの墓群も拡大している。



■おわりに

都市環境デザインは、私たちの今日の生活や人々のライフサイクル、ライフスタイルにどのように関わっているのだろうか。

誕生の際にウビナディ（水なで）の水を汲んだウブガー（産井）、農村・都市を問わず、年少期から老年期を通して地域の伝統行事やまつりへの参画、清明祭などの一族行事への参加があり、その後は終の住処である墳墓へのお世話となる。人は誕生から死に至るまで、各ライフサイクルにおいて、地縁・血縁で深くつながっている。特に沖縄のような島しょ地域においては、沖縄本島、周辺離島、宮古、八重山の島ごと地域ごとに、歴史に根ざした文化が息づいている。その表れがまさに地域個性をはっきり示す都市環境デザインそのものであろう。

それがどのように意味をもち、どのように人々のライフスタイルやライフサイクルと関わり、地域の価値観や社会の変動につれてどのように変容しつつあるのかを見つめ、将来のあり方を考えるきっかけにつなげていければと考えている。

金沢における ライフスタイルと 都市環境デザイン —保全と創造から—

埴 正浩

RACHI MASAHIRO

(株)日本海コンサルタント

JUDI代表幹事

1 はじめに

ライフスタイルを辞書でしらべると、「生活様式。特に、趣味・交際などを含めた、その人の個性をあらわすような生き方」(広辞苑)とある。

もちろん、個人の価値観によるライフスタイルもあるが、生活する都市の地形、気象、歴史、文化、祭事などによって、影響を受けるライフスタイルもあると考える。ここでは、後者を中心に、北陸の中核都市であり、歴史都市でもある金沢におけるライフスタイルと都市環境デザインについて述べるものとする。

2 金沢におけるライフスタイル

金沢の特徴として、地形では、城址を中心に市街地は3つの丘陵・台地(卯辰山・小立野台地・寺町台地)とその間を流れる2つの川(浅野川・犀川)からなり、起伏が多い変化に富んだ街である。段差が多いことから坂道や眺望の良いところも多く、また、河岸段丘の緑や市街地の背景となる丘陵地域の豊かな自然が潤いを与えている。2つの川からは、網の目のように市街地を用水が流れ、下流では農業用水として利用されており、街中では近年、暗渠が多かった用水の開渠化が進み、親水空間や防火用水としても活用されている。

また、気象では、四季が明確であり、日本海式気候に属し温暖で多雨多雪である。雪はパウダースノーではなく、水分を含み重い雪質であることから、兼六園などの庭木の雪吊りや、長町の武家屋敷の土塀のコモ掛けなどが見られる。雨の日も多く、「弁当忘れても傘忘れるな」といわれるほどである。

さらに、歴史では、百万石の城下町、非戦災都市であり、江戸時代の町割の多くが現代にも受け継がれている。金沢城址や兼六園をはじめ、江戸時代のままの町割、狭く曲がりくねった路地、急に空間が広がる広見(藩政期に、火災の延焼を防止するために設けられた火よけ地)、惣構堀・用水、寺町・小立野・卯辰山山麓の3寺院群、ひがし・にし・主計の3茶屋街、そして、年々少なくなはなったものの町家が点在するのである。このように、金沢は、非戦災都市であり、大きな自然災害にも遭遇しなかったことから、城下町として形成された都市の骨格や都市施設が現在まで受け継がれ、現代の市民生活が営まれている。

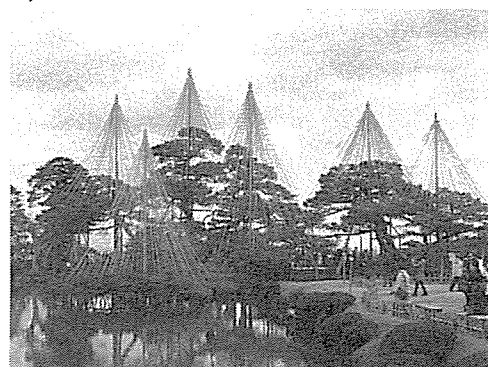
加えて、文化では、「石川100の指標」によれば、石川県は日展入選者数85.5人、人間国宝・工芸技術保持者6.84人(いずれも、人口100万人当たり)であり、華道をたしなむ人4.0%、茶道をたしなむ人3.1%(いずれも、年に1回以上したことの人の割合)で、全国1位である。また、食では、1世帯当たり年間食料費の合計が104万円とこれも全国1位となった。これらは、石川県のデータであるが、県都金沢を表す指標

といってもよい。また、九谷焼、加賀友禅、金沢仏壇、金箔箔などの伝統工芸や、能・狂言、素囃子、加賀万歳、獅子舞などの伝統芸能が盛んである。さらに、茶の湯が、工芸や作庭、建築、和菓子文化までに及んでおり、多様な伝統文化が育まれてきた。

一方、祭事では、「百万石まつり」が昭和27年(1952)から開催されているが、加賀藩主前田利家の金沢城入場を模したパレードで、参加型というより見物型のまつりである。最近、内容のマンネリ化から、見直しが進められている。



金沢城下町絵図:寛文8年(1668)(金沢市HPより転載)



兼六園の雪吊り

3 金沢における都市環境デザイン

(1) 景観やまちづくりの歩み

金沢のこれまでの景観やまちづくりの歩みは、全国に先駆けた1968年の「伝統環境保存条例」に始まり、1989年に「景観条例」(金沢市における伝統環境の保存及び美しい景観の形成に関する条例)、1994年に「こまちなみ保存条例」、1996年に「用水保全条例」、1997年に「斜面緑地保全条例」、2000年に「まちづくり条例」(金沢市における市民参画によるまちづくりの推進に関する条例、金沢市における土地利用の適正化に関する条例)、2003年に景観条例を改正して眺望景観の保全に取り組み、2005年には「沿道景観形成条例」「夜間景観形成条例」など多くの自主条例を制定してきた。さらに、2009年10月には、市域全体を対象とした新たな景観条例が施行されている。

また、2009年1月に歴史まちづくり法（地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律）に基づき、いわゆる「歴史都市」の第1号に認定された。また、歴史都市風致維持向上計画では、旧城下町に加え卯辰山や野田山などの台地、丘陵地を含めて重点区域としている。

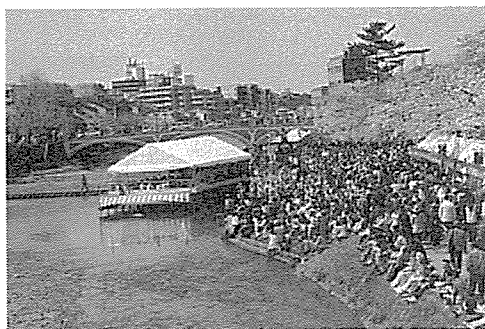
同年6月には、ユネスコより国内では初めて「クラフト創造都市」の認定を受けた。このように、金沢は歴史都市と創造都市の二つの認定を受けたのである。

現在は、金沢城址周辺や卯辰山、浅野川・犀川、惣構・用水などを重要文化的景観区域として、国に重要文化的景観選定の申し出をしており、選定されれば、2009年2月に選定された宇治に次いで、これまでの農村や田園景観以外で市街地の文化的景観が選定されることとなる。

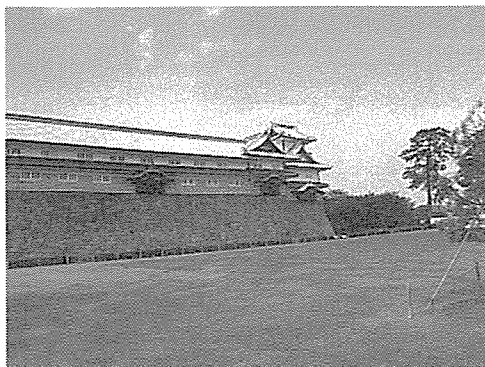
（2）金沢における都市環境デザイン

金沢における都市環境デザインは、江戸・明治・大正・昭和・平成に至る歴史的層性とそこで育まれてきた風土にある。近代都市化を進めながらも画一化に抗しつつ、歴史的な都市環境を保全してきた。そこには、金沢市民による町並み保存、用水保全、旧町名の復活など様々な取り組みがあったことによる。そして、現代アートなど進取の精神で新たなものを取り入れ、近代的な都市環境を創造してきた。

近代的な都市環境は、片町・香林坊～武蔵～金沢駅～金沢港までの都心軸を中心に整備され、歴史的な都市環境は、金沢城址や兼六園、浅野川・犀川、3寺院群、3茶屋街などを中心に保全してきた。このように、保全と創造をうまく使い分けているのが、金沢の都市環境デザインといえよう。



浅の川園遊会



整備が進む金沢城址



市民の憩いの場である犀川緑地



重要伝統的建造物群保存地区のひがし茶屋街

4 新たな都市環境の創造と保全

（1）都市環境の創造

金沢の目指す歴史都市、創造都市は、単に歴史性のある町並みや伝統文化を保全するだけでなく、

新しい都市デザインや文化の創造も含んでいる。例えば、現代アートの金沢21世紀美術館、金沢駅のもてなしドーム（ガラスドーム）、近江町市場再開発などがあげられる。

21世紀美術館は、一部22時まで開館し、夜に美術館を楽しむというライフスタイルを提供してくれている。また、金沢駅のガラスドームは、そのデザインに賛否両論があったが、雨や雪が多い当地にあって、傘を差して、来街者をもてなすというコンセプトで作られている。これも、金沢の気象を踏まえた都市環境デザインの象徴のひとつといえよう。近江町市場の再開発は、老朽化していた建物やアーケードを、再開発によってリニューアルし、建物は5F建てとして高さを押さえ、外装もシックで落ち着いたものとなっている。また、村野藤吾設計の銀行も曳家したが、ほぼ、現在の位置で保全・活用され、1F部分はカフェを併設して利用されている。

また、パブリックアートも街中には数多く設置されている。評価のわかるものもあるが、創造都市としてアートを受け入れる土壌が金沢にはあるといえる。

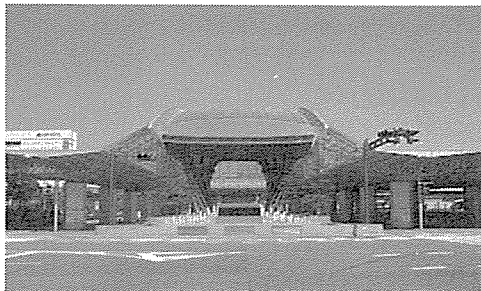
（2）都市環境の保全

金沢の代表的な歴史的景観としては、ひがし茶屋街、主計町茶屋街は重要伝統的建造物群保存地区に指定されており、現在、卯辰山山麓寺院群や寺町寺院群も伝建地区の指定に向けて保

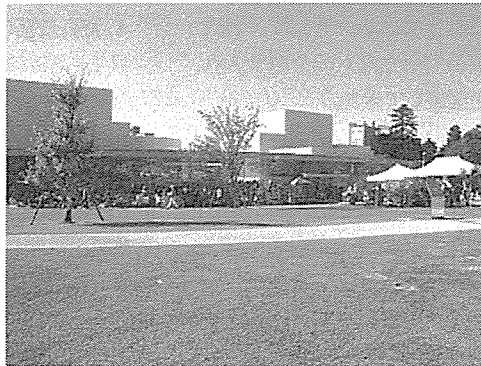
存調査が行われている。また、伝建地区までのまとまりはないが、こ（小さいまたは古い）まちなみ保存区域が市内に10箇所指定されている。

金沢城址には石垣の博物館といわれるほど、穴太衆による「野ヅラ」「打込ハギ」「切込ハギ」など多様な積み方の石垣がある。金沢城址の隣接地にあった県庁が駅西地域に移転したことにより、石垣が良く見えるようになっている。

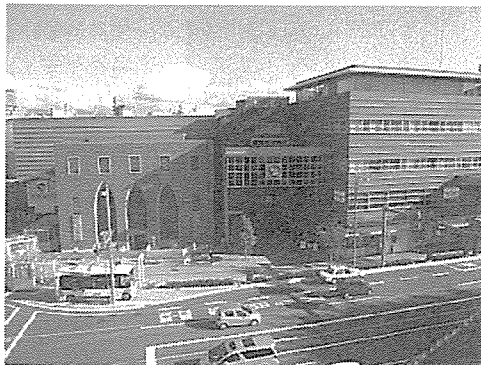
用水の保全に続いて、堀の再生も行われている。金沢には、内と外惣構堀があり、大半は埋められるなどして残っていないが、一部は現在も残っている。すべて復元するには、多くの年数と費用を要するが、出来るところから復元を図っている。



金沢の玄関口・もてなしドームと鼓門(提供:金沢市)



市民にも親しまれている金沢21世紀美術館



再開発された近江町市場と保全された銀行



街角に設置されたパブリックアート

一方、町家については、市は2008年3月に「金澤町家継承・利用活性化基本計画」を制定し、町家の保全・活用に取り組んでいる。この動きと呼応し、市民サイドでは、NPO法人金澤町家研究会が設立された。金澤町家研究会は、金澤町家の活用・再生・継承に取り組んでいる。また、昨年に引き続き秋に「町家巡遊」というイベントを約1ヶ月間行い、さらに、10月16日～18日には、「第三回全国町家再生交流会金沢大会」を開催している。

5 金沢におけるライフスタイルと都市環境デザイン

金沢では、地域性、歴史性、そのなかで育まれた伝統文化などを有し、台地・丘陵地や河川など起伏の富んだ地形と、堀や用水、近世城下町として計画的に整備されてきた街路網、そして寺院や町家、茶屋などの町並みが歴史的な重層性を保全してきた。また、ガラスドームや21世紀美術館に代表されるような近代的な都市環境を創造してきた。

また、景観形成に早くから取り組み、こまちなみや用水保全、まちづくりなどユニークな自主条例を制定し、個性豊かなまちづくりを推進してきた。さらに、NPOなど積極的にまちづくりに取り組む団体も増えてきている。これは、金沢という器で育った市民意識の高さの現われともいえる。

一方、歴史都市、創造都市の認定は、まさに金沢の個性が評価されたものである。特に、文化的景観は、文化財保護法の定義によると「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地」とあり、それは、



こまちなみ保存区域に指定されている里見町



保存調査が進む寺町寺院群

まさに歴史都市金沢に暮らしてきた市民のライフスタイルそのものが、現在の金沢の都市環境を保全、創造してきたといえよう。

最後に、個人の価値観と同様にライフスタイルは多様であり、一律に定義することは難しい。しかしながら、歴史都市、創造都市という個性を持った金沢において、個々のライフスタイルは、その歴史性や現代性、未来性を楽しみ、生活の中で活かしていくこととなる。

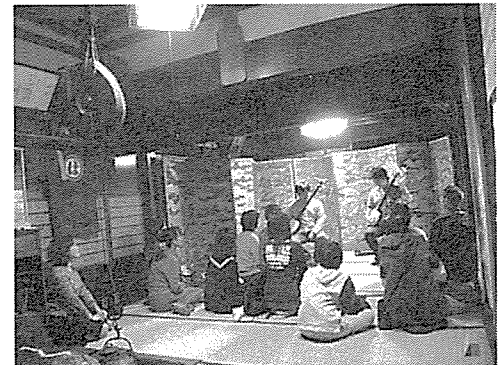
そして、市民が金沢に対して愛着や誇りを持ち、クオリティ・オブ・ライフを享受できるように、金沢は今後とも質の高い都市環境デザインを保全・創造していく努力が必要である。

参考文献

- ・金沢市歴史的風致維持向上計画、金沢市、2008
- ・石川100の指標、石川県、2009
- ・「町家巡遊」パンフレット、NPO法人金澤町家研究会、2009
- ・金澤町家継承・利用活性化基本計画、金沢市、2008



一部復元された東内窓構



町家巡遊の様子

特集 5

港北ニュータウン のライフスタイル

我が国最大規模の土地区画
整理事業における地権者・公
団・横浜市の三者協働のまち
づくりと新旧住民の融合

高田 剛維

㈱山手総合計画研究所

港北ニュータウン開発事業は、昭和40年2月の横浜市六大事業によって掲げられた開発区域約2,530ha（最終的な計画面積は約1,340ha）、権利者約3,300人の我が国最大規模の土地区画整理事業です。

このニュータウンの最大の特徴は、当時の飛鳥田横浜市長によって最初から「住民参加のまちづくり」が明言されていたことでした。

古くからの地権者のほとんどは農民であり、ニュータウン開発に対して、様々な思いが交差し、地権者同士の対立などもありましたが、それでも地域のリーダー達の献身的な努力や横浜市や住宅都市整備公団（現：都市再生機構 以下「公団」と記す。）の協力を得て、事業促進のための組織を確立し開発への道を見出し、さらには、まちの将来を考えて地権者自らが主体的にまちづくりに関する研究会を立ち上げました。

その代表的な研究成果として、その後の土地区画整理事業手法の主流となった「申し出換地制度」や、現在も港北ニュータウン全域を対象に定められている「街づくり協議地区」等があります。

そして、平成2年の街びらき後も地権者や新住民達によって形成された多くのコミュニティにより、身近な環境整備から様々な取り組みを自主的におこなっています。

まずは、この港北ニュータウンのライフスタイルの背景にある地権者・公団・横浜市による協働のまちづくりから追ってみようと思います。

1 農村からニュータウンへ

横浜市北西部に位置する港北ニュータウンは、かつて、なだらかな丘の畑と竹林や山林と谷戸には水田が広がる農村地帯でした。谷戸の道路沿いにはいくつかの集落があり、生活は決して豊かではなかったものの人情に厚く、お祭りの日などは家族総出で手伝うような、心豊かな人々が住むのどかな農村風景が広がっていました。

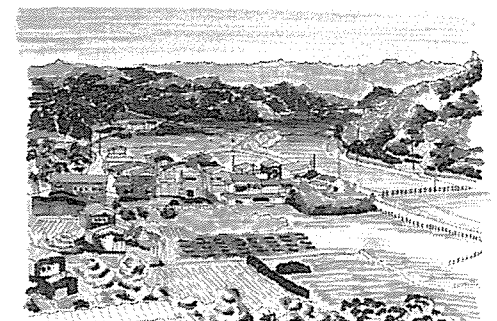


図-1 昭和40年ごろの港北ニュータウン開発区域の風景
／作画 高田剛維

一方、横浜市全体では、米軍による長引く接収のため戦災復興事業が立ち遅れた上、臨海工業地帯の造成等工業化の偏重により、都市整備の相対的な立ち遅れがみられました。さらに主として東京からの急激な人口流入により、既成市街地の過密化と周辺の農地や丘陵の乱開発など、生活環境の悪化が急速に進んでいきました。

昭和40年2月、当時の飛鳥田横浜市長は無秩序に拡大都市化する横浜に新たな方向を与えようとし、その具体策として後の「横浜市6大事業」と呼ばれるプロジェクトを発表しました。その1つが港北ニュータウン開発事業です。

2 地権者・公団・市による三者協働のまちづくり (港北ニュータウン開発対策協議会の発足)

横浜市は翌年の昭和41年7月から、「市民参加によるまちづくり」を掲げて地元説明に入りました。その内容は、「30万人の人口を定着させ、近隣の農家は新鮮な野菜を住民に提供し、消費者と生産者が一体となる都市農業をめざす。」というものであり、昭和55年に完成を予定しているので、皆さんの所有地の50%買収（最終的には40%買収）に協力をお願いしますというものでした。

ただちに地域の各町会や部落別に集會が重ねられ、昭和42年6月には農協を通じて港北ニュータウン開発促進協議会が立ち上げられましたが、「先祖からの土地を減らしたくない。」等とする反対派、「生活様式が近代化して、昔の農業のままでは嫁に来る人がいない。」等とする賛成派、「少しは協力しても良いが、4割買収は多すぎる。」等とする中間派などが存在し、どの地域でも意見や立場が分かれています。

そんな中、昭和43年2月に中川・都田・山内・新田の4地区から代表者を選出し、横浜市及び公団と地元との間をつなぐパイプとしての役割を担う「港北ニュータウン開発対策協議会（以下、「対策協」と記す。）が発足されました。

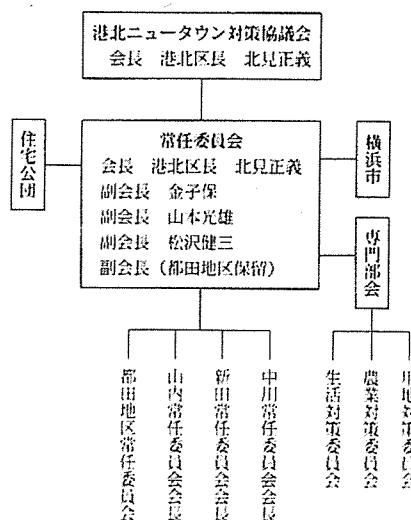


図-2 港北ニュータウン対策協議会組織図
／「港北ニュータウン物語」 徳江義治 山本光雄 著
／2006年5月

この対策協は、各地区から選出された委員による常任委員会及び事業対策、農業対策、生活対策の各専門委員会によって検討が重ねられ、さらに対策協委員代表と市・公団の三者で協議をおこなうものでした。

協議の内容が、委員により地元の人々に伝えられることにより、また地元の意見や要望等は対策協を通じて市・公団及び関係機関に反映されることにより、対策協は「市民参加によるまちづくり」の実践の場となったのです。

3 地権者・担当者間の人間味ある協議調整を経て

港北ニュータウンを先買い方式土地区画整理事業により開発しようとしていた公団でしたが、当時から横浜市内でも有数の農業地帯であったこともあり、各農協を中心に開発に反対する地権者も多く、開発機運の盛り上がり欠ける状況がしばらく続きました。

しかし、営農希望地権者に対する農業専用地区への交換分合等土地の買収以外の方法も検討され、また、時期を同じくして新都市計画法が公布されたことにより、徐々に用地買収に応じる地権者が増え、公団は昭和44年6月には目標をほぼ達成する約356haの用地を取得しました。

その背景には、公団組織の方針として、『目標面積が取得できなければ事業をおこなわない』という条件があった中、賛成派、反対派の板ばさみに置かれながらも、再三にわたる話し合いを通じて少しずつ計画的なまちづくりの必要性を説いていった当時の対策協委員の活動や、公団、横浜市担当者の業務範疇を超えた献身的な努力などがありました。



図-3 当時の地権者説明と協議の様子
／「望郷」 男全富雄 著／1999年8月

この経過において、当時の地権者の方々が記された記録集には、事業区域内に土地を持っていないにも関わらず、地域のために周辺地権者に事業の内容を説明してまわる地域のリーダーの話（※1）や、事業反対者に「市のまわし者」と揶揄されながらも地域の夢と将来を追い続けた地権者の話（※2）、「固い事言わずに」と地権者から酒を進められ、地域のイベントにも積極的に顔を出した市担当者の話（※3）などが記述されています。

さらに、できるだけ事業中の農家の生活負担を軽減させるため、地権者と公団担当者が協力し、なるべく農地以外の土地で公団の用地取得

がなされました。

このような地権者や担当者のある種人間味のある協議調整は、三者による今後の港北ニュータウン開発事業を円滑に進めていく上で、非常に大きな歩みよりでした。

4 港北ニュータウン建設研究会の設立と申し出換地の実施

昭和47年8月には、港北ニュータウン建設に広く市民、地元、学識経験者も積極的に参加する地権者・公団・横浜市の新しい共同研究機関として、また、対策協に対する諮問機関として「港北ニュータウン建設研究会（以下、「建設研究会」と記す。）が発足しました。

この研究会は地権者達の自主的な活動によって、港北ニュータウン建設に関する資料の収集・分析をおこない、地権者の意向をプランとして反映させ、事業を円滑に進めることを目的とするものでし、「人口計画と土地利用計画」、「日照等指導要綱・建築基準条例」、「工事期間中の生活対策」、「農業的土地利用」、「屋敷林の保存」などの研究が実施されました。

建設研究会は「地元から一人の落伍者も出さない」を合言葉に、これらの研究成果を反映すべく、換地設計で個々の権利者の土地利用希望を反映する手法を提案しました。それがセンター用地、アパート・マンション用地、工場倉庫等用地、集合農業用地の4つの特別な用地からなる申し出換地です。

しかしながら、この申し出換地の実施には2つの障害がありました。

1つは地権者全員の総意が必要であり、多くが農業に従事していた地権者の土地活用をこの時点で決心させなければならなかった事です。

これに対し、建設研究会では各地権者を納得させるべく、不動産鑑定士の資格を持つ地権者を中心に地元で推薦された若い人も加わって、将来的に変更される用途地域の内容を勉強し、不動産としての土地活用の収支計算をして、『建物の高度利用ができれば土地が広くなくても収益が上がる』ことを地権者に説明して周りました。

もう1つが換地の「照応の原則」です。当時の土地区画整理事業においては、換地は従前の宅地の位置、地積、環境等に照応することが原則とされていました。

しかし、大規模な港北ニュータウンでは、通常の原位置換地を主体とした手法では、目標としていたセンター形成などの土地利用計画は実現不可能でした。最終的には、地権者や公団・横浜市職員の努力などにより、公団総裁や都市計画事業を監理する神奈川県庁の理解と決断を得ることに成功しましたが、この前例のない換地手法を実施した決断がなければ、港北ニュータウンは全然違う姿となっていたでしょう。

この申し出換地の実施は、計画的なまちづくりを進めるだけでなく、地権者自らの将来の土地活用を予測させる作業を促しました。即ち、将来を見据えたまちづくり活動の出発点と言えます。また、建設研究会活動に参加した若い人達は、その後の港北ニュータウン事業における地域のニューリーダーとして育っていきました。

申し出換地による特別な用地は土地利用の集積が価値を生み出すので、その土地利用についてある程度方針を約束しておく必要があります。こうして自らの換地の価値を高めるための街づくり協定、建築協定の策定作業などが地権者同士によるグループ討議によって始まりました。



資料出典：『港北ニュータウンだより』第87号
昭和51年5月1日発行

図-4 申し出換地に対する地権者への勉強会の開催
／「私の覚書」金子三千男 著／2001年6月

5 港北ニュータウン事業推進連絡協議会の発足と協定案(街づくり協議指針案)の作成

その後、オイルショック等様々な要因などによる事業遅延（市長及び公団総裁への抗議活動に発展。この抗議活動は翌昭和51年4月に事業遅延による適正補償交渉を開始することで終結。）を経て、造成工事本格化しました。ここで、各地域の特殊性を尊重し、より効率の良い事業を推進する目的で、昭和51年10月に対策協は、4地区の地権者組織代表と、横浜市、公団の代表をもって構成する「港北ニュータウン事業推進連絡協議会（以下、「推進協」と記す。）として改組され、合同協議会・各種専門委員会（事業対策、生活対策、農業対策）を設置し、相互協力によって事業の推進に努力することが決議されました。

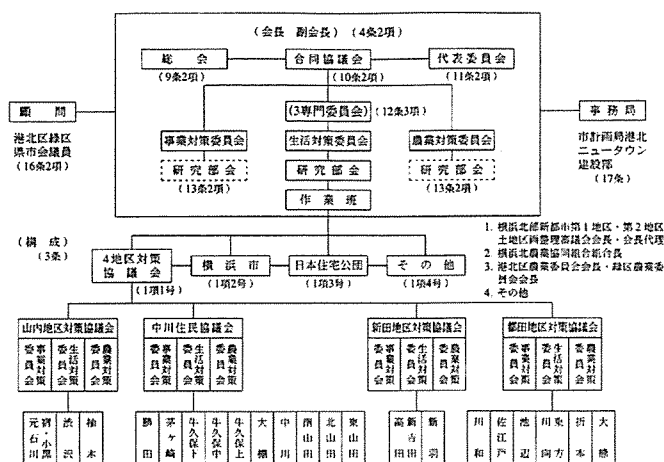


図-5 横浜市港北ニュータウン事業推進連絡協議会組織
／「私の覚書」金子三千男 著／2001年6月

このうち、生活対策委員会は、地権者が主体となって将来にわたり環境を守っていくためのまちのルールを検討する作業部会を昭和52年1月に発足させました。

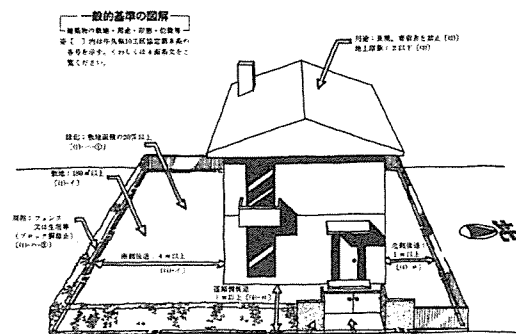
同年6月、生活対策委員会は、現在の都市計画法、建築基準法ではニュータウンの環境保全は厳守できず、地権者が自らルールを作り守っていく事で環境が保全できるという結論に達し、地権者自ら①安全な街づくり、②ゆとりある街づくり、③街区美観の向上、④日照の確保、⑤プライバシーの保護、⑥商業活動の向上、⑦工業活動の向上の7つの構想を踏まえた将来用途地域に対応した特別な用地ごとの建築協定の素案を作りました。

この時点での主な内容は、『住宅地は田園調布、成城のような高級な街』、『商業地はレジヤースとショッピングを合わせた街』『工場地区は周囲に気をつかわず操業できる準工業地域』というものでした。

最終的に、委員の努力や広報活動などにより、各地権者に自らの生活環境を守るまちのルール
の大切さを浸透させることに成功し、横浜市に
よって、建築協定素案をベースとする建物計画
のルール等を定めた「街づくり指導基準」が昭
和58年6月に定められました。

これは、現在の横浜市街づくり協議指針の前身となるものであり、当時は土地区画整理法第76条に基づく許可申請制度を活用して規制誘導をおこなっていました。（その後、横浜市は地権者からの街づくり指導基準の継続意旨を受ける形で、換地処分後の平成8年9月30日に市の街づくり協議要綱に基づく「街づくり協議地区」に港北ニュータウン全地区を編入している。）

現在の街づくり協議指針は、基本的には建物主に対して景観向上の協力をお願いするものですが、その内容には、当時の地権者達の研究成果と想いが込められています。



図一6 牛久保10工区で実際に定められた建築協定

6 港北ニュータウンのライフスタイル

こうして都心への人口集中に端を発した国レベルの住宅問題を解決するための港北ニュータウンは、地権者側の意向や希望といった膨大なエネルギーを反映する対策協や建設研究会、推進協といった協働のシステムを通して、多くの夢を実現する事業となりました。

平成8年9月の換地処分公告に伴う推進協の解散まで30年近くもかけて約1,300haもの広大な土地に築いてきた、まさに協働まちづくりの結晶であり、その過程には、腹を割って話す本音の協議調整や立場を超えた献身的な努力など、随所人間くささが散りばめられています。

一方、街びらき後には、できたての公園、緑道、歩行者専用道路などを部分的に利用し、清掃するなどして知り合った新住民達同士でグループを作り始めました。平成6年に都筑区が誕生し、区の生涯学習センターがおこなう市民活動支援事業が始まると、ニュータウン内を緑道でネットワークするグリーンマトリックスをベースとした活動組織が多数立ち上がりました。

現在も都筑区内で打ち水大作戦やキャンドルナイトイベント等の参加型まちづくりを展開しているNPO法人I love つばきや、定期的に早洩川の清掃活動等をおこなっている早洩川を奏でる会もそれらのひとつです。

また、これらの活動組織をネットワークする連絡協議会として「都筑わ創り連」が立ち上がり、誕生したばかりの区役所が作成しようとする「都筑区の紹介図書」作成の担い手となりました。



図-7 I love つづきによる「1万人のキャンドルナイト」
(2006年6月みなきたウォークにて HPより抜粋)

やがて、新住民に古くから街づくりに関わってきた地権者達も加わった新旧融合のコミュニティが形成されてきました。

市条例で認定された公園愛護会は自主的な公園・緑道管理活動をおこなう新旧融合の代表的な組織で、平成 21 年現在都筑区内の公園 136 箇所中、121 箇所で愛護会が立ち上げられています。

また、平成 15 年に立ち上げられた都筑区主催の「つづき水と緑の魅力アップ推進委員会」は、ニュータウン建設研究会に参加した農家のニューリーダーや、グリーンマトリックスをベースとした新住民による活動組織、公園愛護会等の新旧住民が融合したメンバーで構成され、グリーンマトリックスの充実等を中心に活動を展開した委員会です。

この委員会は平成 20 年度で終了しましたが、その後も委員会メンバー 33 人で主体的に「都筑魅力アップ協議会」を立ち上げ、地区全域を跨ぐグリーンマトリックスを通じて、各住民組織とのソフトなインフラネットワークを形成しています。

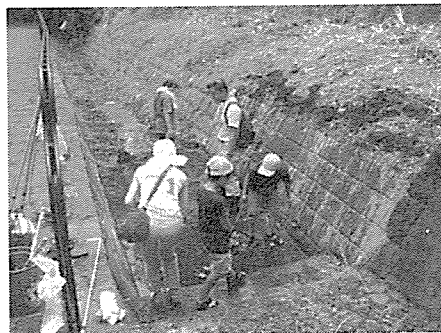


図-8 水と緑の魅力アップ委員会の活動の様子
(子ども達によるせせらぎの夢づくり)

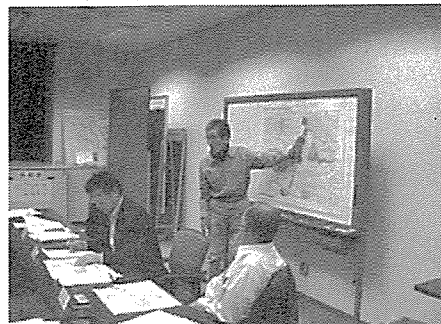


図-9 水と緑の魅力アップ委員会の活動の様子
(中央地区の魅力づくり検討)



図-10 水と緑の魅力アップ委員会の活動の様子
(水と緑の散策マップ作成)

これらの他にも、港北ニュータウン事業時の地権者生活対策の確立を目的として設立された港北ニュータウン生活対策協会（現：NPO法人港北ニュータウン記念協会）が、当時の地権者や公団担当者とともに、親水公園における桜の植樹や朝市の開催支援、都筑の風景フォトコンテストの開催などの活動をおこなっています。



図-11 冊子「写真で見るつづきの景観 50」
／NPO法人港北ニュータウン記念協会

こうして、港北ニュータウンの「市民参加のまちづくり」は、対策協の設立に端を発し、形や名称を変えながらも継承されています。志半ばで倒れてしまった地権者達の多い事でしょう。しかし、当時の地権者からの“夢”の遺伝子は、新旧融合のコミュニティを通じて新住民達に受け継がれています。

港北ニュータウンのライフスタイルとは、こうした“夢”の遺伝子を受け継ぐことから始まるのではないのでしょうか。

それは難しいことではないと思います。なぜなら、港北ニュータウンの至るところに、当時の地権者や新住民の色々な想いが散りばめられているのですから。

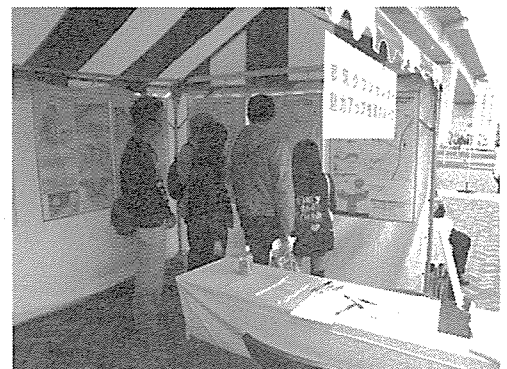


図-12 道ゆく人に都筑魅力アップ協議会の活動内容を
を紹介している様子(平成 20 年 11 月 都筑区民祭より)

文中(※)の資料出典

- ※1 港北ニュータウン物語／徳江義治 山本光雄
／2006.5.26 P496 より
- ※2 港北ニュータウン回想／金子三千男／2008
P10 より
- ※3 港北ニュータウン物語／徳江義治 山本光雄
／2006.5.26 P549 より

「まちのクラブ活動」 というコミュニケーション装置

宮奈 由貴子

MIYANA YUKIKO

特定非営利活動法人 NPO 支援センター
ちば事務局長
柏の葉アーバンデザインセンター
(UDCK) 市民活動担当ディレクター

■まちへの愛着を育む仕掛け

まちが豊かで良質なコミュニティへと育つためには、いかに、そのまちの生活者がまちづくりに参画し、まちへの愛着が育まれるかが非常に重要である。しかし、その状態を生み出し、維持継続していくためには、ハード面のみならず、ソフト面における様々な仕掛けが不可欠である。

現在、千葉県柏市に位置する柏の葉キャンパスエリアでは、273ha という広大な土地を舞台とした、公（千葉県・柏市）、民（三井不動産グループ・NPO・住人・地域企業）、学（千葉大学・東京大学）連携による新しいまちづくりが進められている。

今回は、まちへの愛着を育み、持続可能な豊かな暮らしをつくるためのコミュニケーション措置として進めているプロジェクト、「まちのクラブ活動」について紹介する。

■「あったらいいな」を誘発する

これまでの住宅開発は、行政とディベロッパーが中心となり、まちが完成してからコミュニティづくりをスタートするというのが一般的である。しかし、開発規模が大規模なこの柏の葉キャンパスでは、まちの完成を待ってからでは遅すぎると考え、先行して入居するマンション住人やこのエリアの生活者に、まちができるプロセスに参画してもらおうと考えた。しかし、筆者の経験では、参画といった瞬間にハードは高くなり、実際に足を踏み入れる人は固定化し、多様性が生まれない。さらに生活する人々が親しみを持てる言葉や文脈へと変換されることが必要となる。まちのクラブ活動では、こうしたパブリックリレーションにおいても注力し、生活者の「あったらいいな」を誘発し、気軽に参加できる日常プログラムを提供するところからスタートしている。



バンビクラブ



ピクニッククラブ

■住人発案クラブとプロジェクト移管型クラブ

2008年8月からスタートしたクラブ活動は、現在、16のクラブ、480人が部員登録をしている。各クラブの活動の他に、クラブ部員を横につなぐイベントであり、新入部員の参加を促す企画を、季節ごとにテーマを設け実施している。月の平均活動延べ人数は約380人、クラブハウス（部室）の来館者数は、450人を越える。

その中で急成長中のクラブに、バンビクラブがある。0歳～2歳前後の赤ちゃん和妈妈パパのためのクラブで、活動から3ヶ月で部員が50人を数えており、このエリアでの子育て層の多さをうかがい知ることができる。クラブの立ち上げは、「まだ歩きだす前の赤ちゃんを連れて遊びにいけるところが少ないよね、どこにもいってもお金がかかるし。」という住人の声から、ならば、子育て中のママパパがあつたらいいなと思えるクラブをつくろうということでスタートした。現在は、ベビーヨガなどの習い事から、いわゆる公園デビューに代わるような友達づくりの空間になっているが、毎回、どんな企画があつたらいいかをメンバーが話し合い、その企画に必要な講師を自ら探し運営している。

また、住人発案とは異なり、アートプロジェクトに起因を発するクラブも多数存在するが、その一つに、柏の葉ピクニッククラブがある。もともとは、新しい生活スタイルの登場感を図るため、多彩なアーティストが登場するピクニックイベントを展開し、地域住人の社交の場を創出するとして、まだ新住人が移り住む前からスタートしたアートプロジェクトである。この年に1度の単発イベントを、どのように継続していくかを考えた際に、有効であったのが「クラブ化」である。まちの開発段階では、プロモーションイベントが開催されることはどこにでもある話だが、住人主体で継続されてきた事例は少ないのではないかと。柏の葉ピクニッククラブは、初年度のピクニックイベント後すぐに結成され、翌年は、企画運営者として初年度の4000人の来場者数を15,000人まで引き上げた。

どちらも、生活者の「あったらいいな」を誘発し、クラブというかたちで継続が可能となっている。同時に、家でも会社でも学校でもSNSでもない、クラブ活動というコミュニティで友達づくりができたことは、特に、引っ越してきたばかりの住人にとって、とても存在意義のあるものとなっている。

■まちの資源を「見える化」する

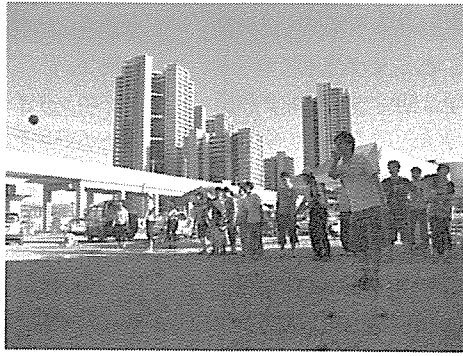
まちのクラブ活動は、実に多様な人々の知恵やノウハウ、マンパワーにより支えられている。こうした個々は小さいが、クラブにとっては大きな財産を日々紡ぎあわせ企画化している。その際に重要なのが、「見える化」である。

「マチノ先生シリーズ講座」は、まちに住む

また、まちの見える化は、どの街にも潜在する政治や環境への無関心、独居老人の孤独死、引きこもりや孤独などを回避するための一助にも成りえると考えている。あらゆる人々が、自分の好きなことで活躍できる場をもつことは、居場所や生きがいを持つことにつながる。隣人を知り、人とつながることは、まちにも人にも良い影響をもたらすに違いない。

町内会のお祭りも、神社のお祭りも、商店街のお祭りも存在しない柏の葉エリアにとって、マルシェは、少なからずまちの賑わいを創出し、多様な主体が協力するプロセスにおいては、地域力を育む機会を創出しているのではないかと。

マルシェヨロールとUDCK



ベタンククラブ

■学びと実践「放課後はクラブ活動」

現在、柏の葉キャンパスエリアでは、いくつかのスクールが存在するが、千葉大学環境健康フィールド科学センターが主催する「千葉大学柏の葉カレッジリンク・プログラム」や、UDCKが柏市と企画する「UDCK まちづくりスクール」などがある。もともと、「まちのクラブ活動」というネーミングは、千葉大学、東京大学という2つの大学を有する「柏の葉キャンパス」という地名にちなみ、大学生も、社会人学生も、小学生も、放課後にクラブ活動があったら面白い！という閃きからスタートしており、実際に、カレッジリンクやまちづくりスクールの卒業生がクラブを立ち上げている。

これらスクールとの連携は、双方にとって非常によい関係をもたらしている。学ぶ意欲が高い、もしくは興味のある分野に触れていたいと思う受講者にとって、学んだら、それを活かして実践したいと思う人も少なくなく、クラブ活動は、継続的な活動の受け皿を有している。

また、クラブ活動には、顧問と呼ばれる先生や専門家がつきものだが、実際に、柏の葉はちみつクラブの養蜂技術については、千葉大学の三輪正幸助教に指導いただき、学外で、大学教授と住人との交流がつくられている。

①心得

まちのクラブ活動 5つの心得

1. クラブは、本気で遊ぶ場である。
あなたの“あったらいいな”を実現しよう。
2. クラブは誰にでも開かれている。
家族で楽しむもよし、ママ友達と立ち上げるもよし。
3. クラブの名刺をもって街にでよう。
“〇〇のお母さん”でも、“二丁目の〇〇さん”でもない自分を表わす活動を持とう。
4. 案ずるなかれ！
あなたの“あったらいいな”はまちにとっても、大きな財産だから。
5. クラブでまちをつなげよう。
まちのクラブ活動は、みんなの“コミュニケーション装置”だから。

■クラブ活動が目指す「地域力」のエンパワーメント

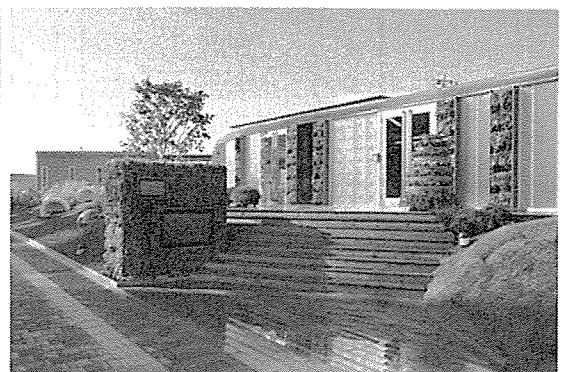
クラブ活動のイベント等は、常に「あったらいいな」という生活者視点を具現化することを心がけている。しかし同時に、それらのニーズに対して一方向にサービスを提供するのではなく、部員やまちの生活者と一緒にできることを常に考え、プレーヤーを育てていくことが継続性で最も重要なことだと考えている。

こうした生活者の声の掘り起こしは、楽しいことだけでなく、既に、子育て環境などの地域課題の掘り起こしにもなっている他、暮らしの充実を図る、いわゆる市民活動と呼べる領域に達してきており、今後は、コミュニティビジネスとして育てていくことについても検討している。

これからのまちづくりや地域課題の解決は、行政だけ、NPO だけではもはや解決できることのほうが少なく、筆者が所属するNPO 支援センターちばでは、市民の志をNPO という枠組みを用い、あらゆる地域資源(人・物・金・情報)を駆使して解決していく際のコーディネイターを担っている。しかし、その現場に参画している人々をみると、NPO/市民活動と言った瞬間に、どこか他人事のように聞こえ、足を踏み入れる人材が固定化されてしまっているのではないかと感じてきた。また、地縁団体である自治会などにおいても、世代や性別の固定化などが顕著である。

そこで、まちのクラブ活動では、NPO/市民活動という言葉も、住人活動という言葉も、現時点ではあえて使用していない。「まちにあったらいいなと思ったからつくった」という、身の丈で、かしこまらないほうが、まちへ貢献する場合も多いからだ。

つまり、まちのクラブ活動がつくる一つ一つのコミュニティは、まちを豊かにするためのコミュニケーション装置であり、NPO 支援センターちばは、こうしたコミュニケーションの連鎖を、地域力を高める大きなエンジンへと育てていくことを戦略的にデザインしていく。



クラブハウス

大崎広域圏の生活文化軸と近代化遺産

永松 栄

NAGAMATSU SAKAE

宮城大学事業構想学部教授

■大崎広域圏の概要

大崎広域圏は、大崎市、加美町、色麻町、美里町、涌谷町が構成する広域行政組合のエリアに対応し、圏域面積は 1,524k m²で人口は 218,000 人となっている。この内、大崎市は平成大合併で古川市と 6 町が合併し、797km²、人口約 135,000 人の圏域となった。同様に加美町は中新田町を中心に他 2 町が合併し、460km²、人口約 2,600 人の圏域となった。

圏域の西端は奥羽山脈で山形県に接している。圏域は大きく、西側の山地・中山間地と東側の平野に分かれている。その平野の東側の端を南北に奥州街道(国道 4 号)が走っているが、この奥州街道の位置関係は宮城県内区間に概ねあてはまる。

奥州街道県内区間での人口集積は、概ねこの南北方向の街道と西から東に流れる河川に沿った交通路の交差点に位置することが多い。

縄文的ライフスタイルと弥生的ライフスタイルの遷移期に思いを馳せると、奥州街道の東側に農耕、西側の漁労、狩猟、採取というような文化配置を想定したくなる。

ここで提起したいのは、この圏域の定住のベースとなっている構造として南北方向の中央と辺境を結ぶ国土文明軸が一般に意識されるのに対し、これに直行し海岸、平野、山地を結ぶ生活文化軸を軽視しがちではないかということである。この圏域でいうと、江合川とこれに沿った羽後街道(国道 47 号)、鳴瀬川とこれに沿った中羽前街道(国道 347 号)のような軸がこれに相当する。

■大崎広域圏の近代化遺産

昨年度から宮城県内の近代化遺産活用調査を、大学の自主研究として行っている。この研

究は、既に国庫補助を受けて全国的に実施された県別近代化遺産調査を基礎資料に使い、個々の物件の活用可能性を見出そうとしている。

近代化遺産という用語は、文化庁の使用例に従えば「近代化遺産とは、幕末から第 2 次世界大戦期までの間に建設され、我が国の近代化に貢献した産業・交通・土木に係る建造物」である。(宮城県の調査では昭和 30 年頃までの物件が含まれている)

産業関連の遺産では宮城県の特性を表わし、農業関連施設と醸造所が多い。農業倉庫と醸造所は、昨年度調査で新たにカウントを加えたが、まだ他にも存在する可能性が高い。こうした施設は、平野部の拠点だけでなく、中山間地の拠点にも立地している。

鉄道関係では、意外に残存する駅舎は少なく、鹿島台駅と涌谷駅は希少価値になっている。

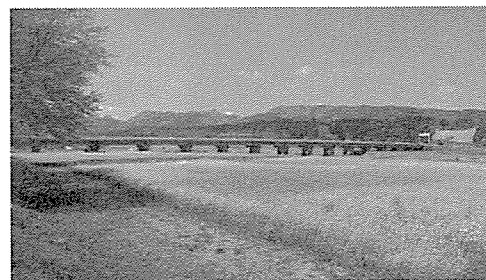


図 1 江合川の上流に架かる川渡大橋(大崎市)

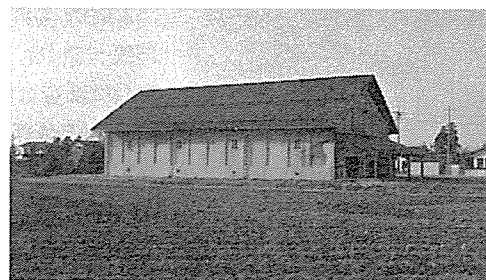


図 2 田尻町の農協倉庫(大崎市)

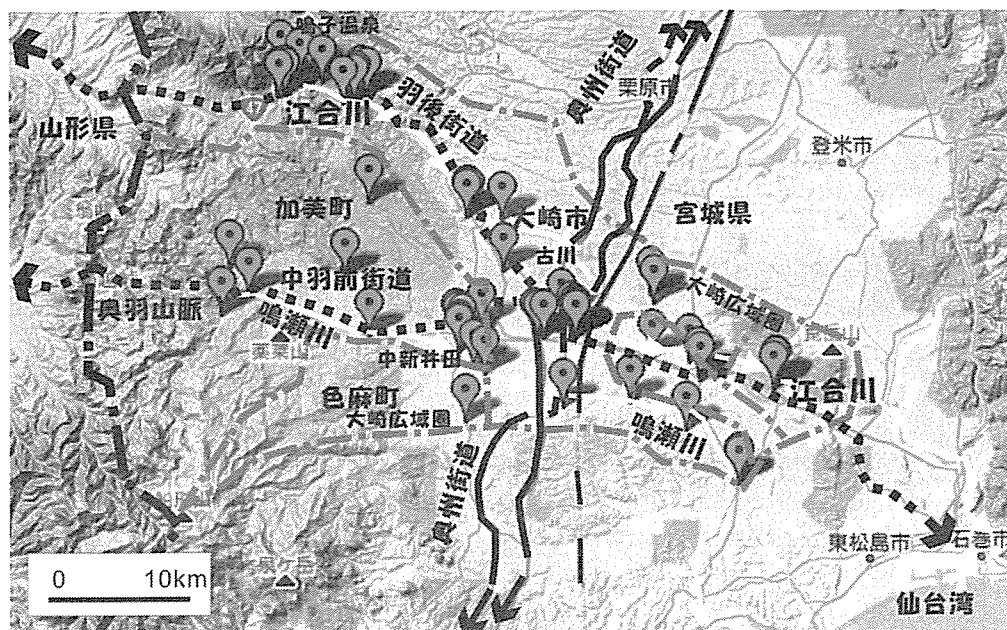


図 3 大崎広域圏土の構造と近代化遺産の文布
(ベースは google map)

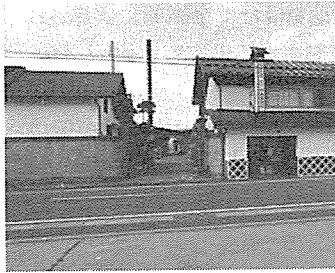


図4 中新井田の醸造所(加美町)



図5 東北本線鹿島台駅(大崎市)

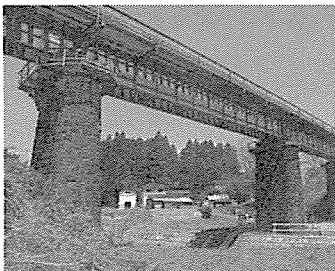


図6 陸羽東線境川橋梁(大崎市)

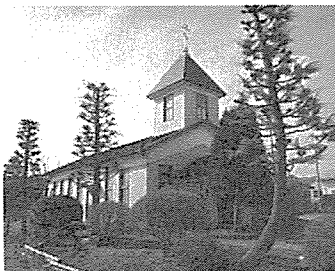


図7 中新井田ハリストス正教会(加美町)

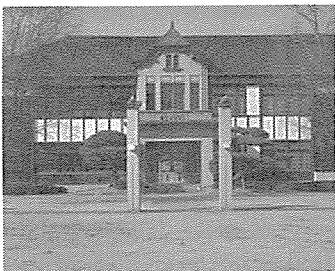


図8 旧鳴瀬小学校(加美町)



図9 江合川上流に建設された鳴子ダム(大崎市)

鉄道橋梁が恒久構造化したのが大正時代、道路橋梁では昭和に入ってからのものである。鉄道橋の橋脚に煉瓦積みを用いているものも多く、人目にふれやすいものの中に、存在をPRしたいものもある。こうした交通インフラは全国共通の整備の跡がうかがわれる。

土木関係では、砂防堰堤整備が江合川上流の鳴子温泉地区で大正末期からが続けられている。一連の玉石積み砂防堰堤の周りを散策できるところもある。また、鳴瀬川水系の上多田川には、堤高10mの迫力ある砂防堰が築かれている。

鳴瀬川上流には、東北電力の門沢発電所がある。ここでは川から水を取り入れ、水道橋や暗渠を含む水路で発電所より一段高い位置にある水槽に流し込み、そこから2本の水圧管路で崖下にある発電所機械室に向けて水を重力落加させている。

その他の分類は、概ね近代を象徴するような建築物と住宅ということになる。こうした建築物の残存は、もちろん拠点性のある市街地に偏りがちであるが、必ずしも人口集積が高い市街地に多くなるとは限らない。戦前の建築の場合、耐火建築は大都市を除いて建設されることが少なかったため火災の有無に残存状況が左右されよう。この圏域では、意外にも大崎市古川よりも加美町中新田のほうに多く近代化遺産が残っている。明治、大正期の教育施設・行政施設は圏域全体で5件しか残っていないが、こうしたものは郷土の近代化のイメージの核となっているので大切にしたい。

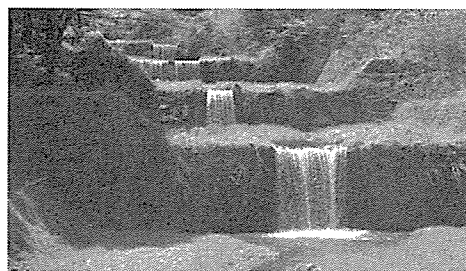


図10 不動滝堰堤(大崎市)



図11 鳴瀬川水系から門沢発電所に向かう水路と機械室上部の水圧管路(加美町)

■大崎広域圏住民の生活圏ビジョン

平野部で仙台都市圏に近いところは、仙台通勤圏に入っている。当然この位置関係は、仙台都市圏北部の郊外型商業集積地の商圏に大崎広域圏も組み入れられていることを示している。もはや、就労、通学、購買に関する圏域では仙台都市圏に取り込まれているともいえる。

平成大合併の影響評価できないことも多いが、この圏域の大崎市や加美町に関して言えば、平地部から中山間地を超え、山地に至る河川流域を獲得したことをポジティブにとらえるべきだろう。

従来、この圏域の基礎自治体は比較的仙台との交通の便に恵まれていることから都市化を指向していたように見える。仙台と生活圏を共有することは良いが、都市化ではなく、現在のバランスの中で農の風景、河川空間、中山間地へのアクセス性を積極的に楽しむべきではないだろうか。

実際にドイツの都市就労者の中には、都市内に住宅を求めることが可能であるのに、わざわざ近郊農業地帯などの農家などを借りて余暇時間を重視した生活をする人達がいる。

今後、我が国も低炭素社会づくりの方向に舵を切ることになり、これを各圏域で実施していくことになる。その前提として、圏域の生活文化が何によって支えられているかが見えていることは大事なことである。大崎広域圏のようなところでは、地域のアイデンティティのシンボルとして近代化遺産を使うことがまず考えられるが、加えて、土地利用ベースで農が主となった地域におけるそれぞれの土地の役割を学ばすきっかけに近代化遺産を使うことが可能なような気がしている。

大分類	中分類	小分類	明治	大正	昭和	計
産業	農業	農業倉庫		2	4	6
		改良事業	2			2
	小 計		2	2	4	8
	商業・サービス		2		3	5
	醸造業		4	2		6
	中 計		8	4	7	19
交通・通信	鉄道	橋梁		16		16
		隧道		3		3
		駅舎	1		1	2
	小 計		1	19	1	21
	道路(橋梁)			1	5	6
	中 計		1	20	6	27
土木	河川・河岸	多目的ダム			1	1
		砂防堰堤		1	6	7
	小計			1	7	8
	上下水道(上水道)		2			2
	電力・ガス(水力発電)			3		3
	中 計		2	4	7	13
その他	教育施設		1	3	4	8
	行政施設		1			1
	医療施設		1		4	5
	宗教施設				1	1
	住宅		1		1	2
	軍事施設				1	1
中 計		4	3	11	18	
大 計		15	31	31	77	

図12 大崎広域圏残存近代化遺産数内訳

湘南ライフスタイルと都市環境デザイン

菅 孝能

邸園文化調査団

鎌倉歴史的資産調査会

さる七月の末の休日の夕刻、鎌倉市扇ガ谷の古我邸のお庭で AUN 野外ライブコンサートが行われた。AUN は和太鼓、三味線、尺八、箏、笛などの和楽器の魅力を繊細な音色と大胆な奏法を駆使した斬新なポップスなどで世界に発信しているグループである。古我邸は、鎌倉文学館（旧前田家別邸）、旧華頂宮別邸と並ぶ鎌倉を代表する現存洋館別荘の一つで大正 5 年に浜口雄幸別邸として建造された。所有者古我氏の御好意で解放された広いお庭を埋めた 400 人程の聴衆は、暮れなずむ洋館と緑を眺めながら、辺りにすだく虫の音と柔らかかだが若々しい活力のある和楽器のコラボレーションをひととき楽しんだのである。

同じ鎌倉の西御門には大正 15 年築の旧里見弴邸が洋館と茅葺き和室の風雅な趣を見せているが、昨年より小規模なコンサートや展覧会やパーティなどの会場として活用しながら貴重な建築遺産を保全する「西御門サローネ」と称する試みが始まり人気を呼んでいる。

私達は六年程前から、葉山から小田原箱根にかけての相模湾沿岸一帯で、各地に残る別荘等の歴史的建造物の保全と、それらを活用した新しい日本の文化を発信する試みを、「邸園文化圏再生構想」と名付けて各地の NPO やアーティストと協働して展開している。

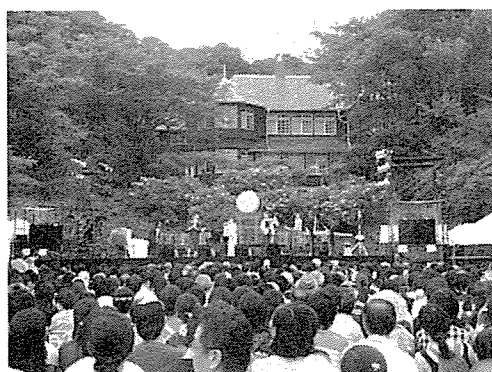


図-1 古我邸（鎌倉）でおこなわれた AUN コンサート



図-2 旧里見邸（鎌倉）でのコンサート

1. 湘南リゾートのルーツ

相模湾沿岸一帯は湘南と呼ばれる海浜リゾートであり、首都圏有数の良好な住宅地として、海洋ス

ポーツレクリエーションのメッカとして、海岸線を走る R-134 沿道に代表されるマイカー族の日帰り行楽地として名高い。また、近年、湘南が脚光を浴びるようになったのは、石原裕次郎、加山雄三、サザンオールスターズなど、この地域出身の芸能人達の活動に負うところも大きい。

その地域イメージが形成されるそもそもの発端は、明治 5 年（1872）明治政府の米欧使節団がロンドンの南方 60 km にあるイギリス王室や貴族など富裕階級の海浜保養地・ブライトンを視察したこととされる。当時ヨーロッパでは、海水浴療法が盛んになり、温泉から海浜に転地保養地が移るとともに、鉄道の開通により保養地が富裕階級のものから大衆化し始めた時期でもあった。同じ頃、対岸のノルマンディー海岸でもパリから鉄道が延びてリゾート化が進み、印象派の画家達を生むきっかけにもなった。

湘南一帯は、西洋医学の指導に当たったお雇い外国人ベルツや松本順、長与専斎ら医師の保養地整備の進言により明治 18 年（1885）前後に大磯、鎌倉、葉山へ海水浴場が開設され、明治 20 年に東海道線、同 22 年に横須賀線が開通して、サナトリウムなどを備えた転地保養別荘地として発展を始める。使節団に参加したり、ベルツらの患者であった政治家や実業家は医師の薦めに従って湘南の各地に別荘を次々に建てていった。その後、政治家・実業家だけでなく学者・文豪・画家・版画・彫刻・工芸家など明治大正期に活躍し名を残したあらゆる分野の著名人が湘南に別荘や住まいを構え、彼らの事蹟が湘南の各地の地域史に刻まれ、湘南文化を形成してきた。

こうして、ヨーロッパの最新の動きとも符合して湘南が保養別荘地として発展し得たのは、第一に冬暖かく夏涼しい海岸性気候と自然豊かな環境、第二に東京から鉄道を利用して半日到達できる交通の利便性、の二つの地勢的条件が備わっていたからである。さらに、日本の近代を切り開いた開港地横浜の先に位置する湘南は、時代の先端を行く文化の新天地としても人々を惹き付けたのである。

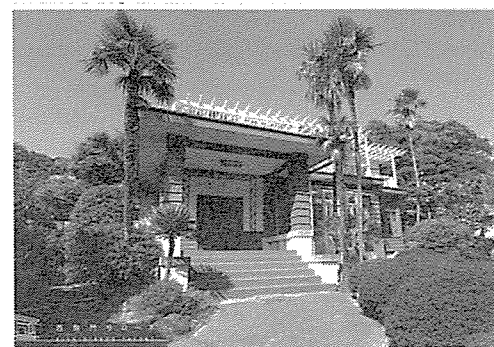


図-3 様々な文化的催しが行われている西御門サローネ

その後、大正 12 年の関東大震災と市街地の復興、

第二次大戦中の疎開、敗戦、華族制度の廃止や財閥解体などにより、湘南一帯の別荘保養地としての性格は大きく変わり、戦後は、東京の復興と共にベッドタウン開発の波が押し寄せ、多くの別荘は失われていったが、それでも、現在も2000棟を超える近代和風住宅や近代洋風住宅などの邸宅が現存しており、その中には現在も個人の別荘や、大規模な別荘を転用した企業の保養所・研修所などが数多く含まれている。湘南の別荘は避暑と避寒の両方で利用される通年使用であったから、そのまま常住化が可能なこともこのように沢山の別荘建築が残っている要因の一つと言えよう。そして、高度成長期に入ると、日本のあらゆる新文化の発信地である東京に至近という地の利、海山の風光明媚な自然環境とゆとりある住環境・住文化が、映画、湘南サウンド、戦後文学、マリンスポーツなどを生み出してきた。

2. 邸園文化圏再生構想

しかし、かつての別荘保養地を記憶する建築は、相続時の様々な障害や、過度な宅地開発、企業のリストラなどにより、次々と取り壊されて、その跡地にはハウスメーカーのミニ開発やマンションが建ち並び、緑豊かでゆとりある住環境・景観が一举に失われていく事態になっている。このような事態は、「土地の記憶」を断ち切り、湘南の魅力の低下と個性の喪失を招き、ひいては活力の低下をももたらしかねない。

そこで、湘南各地の歴史的建造物の保存と活用に取り組む市民活動団体を中心に「湘南邸宅文化ネットワーク協議会」が2003年に発足し、別荘建築や景観の保全運動を始めている。その活動の趣旨は次のようなものである。

- ・湘南、相模湾地域の発展の原動力は、海山の風光明媚な自然環境と、鎌倉・小田原などの歴史都市や明治以降別荘保養地の歴史的遺産とが相まって魅力的な風景と住文化を形成したことである。
- ・当時の建築や作庭の技術を凝らした別荘や庭園が建設され、周囲の自然環境と一体となった湘南らしい空間・景観の一つのルーツになり、その意匠やボキャブラリーは地元工務店や大工、庭師の手によって一般住宅にも普及していった。
- ・こうした魅力的な住環境を求めて文化人・芸術家らが集まり、サロンの湘南文化を形成すると共に、ここで育った若者達は湘南サウンドやマリッジジャー等を生み出した。企業も保養所、研修所、美術館等を設け、来街者達によって地元経済も潤ってきた。
- ・ところが、過度なベッドタウン化や企業のリストラによる昨今の歴史的遺産等の相次ぐ喪失は、地域の魅力の低下と個性の希薄化を招き、活力の低下をももたらしかねない。

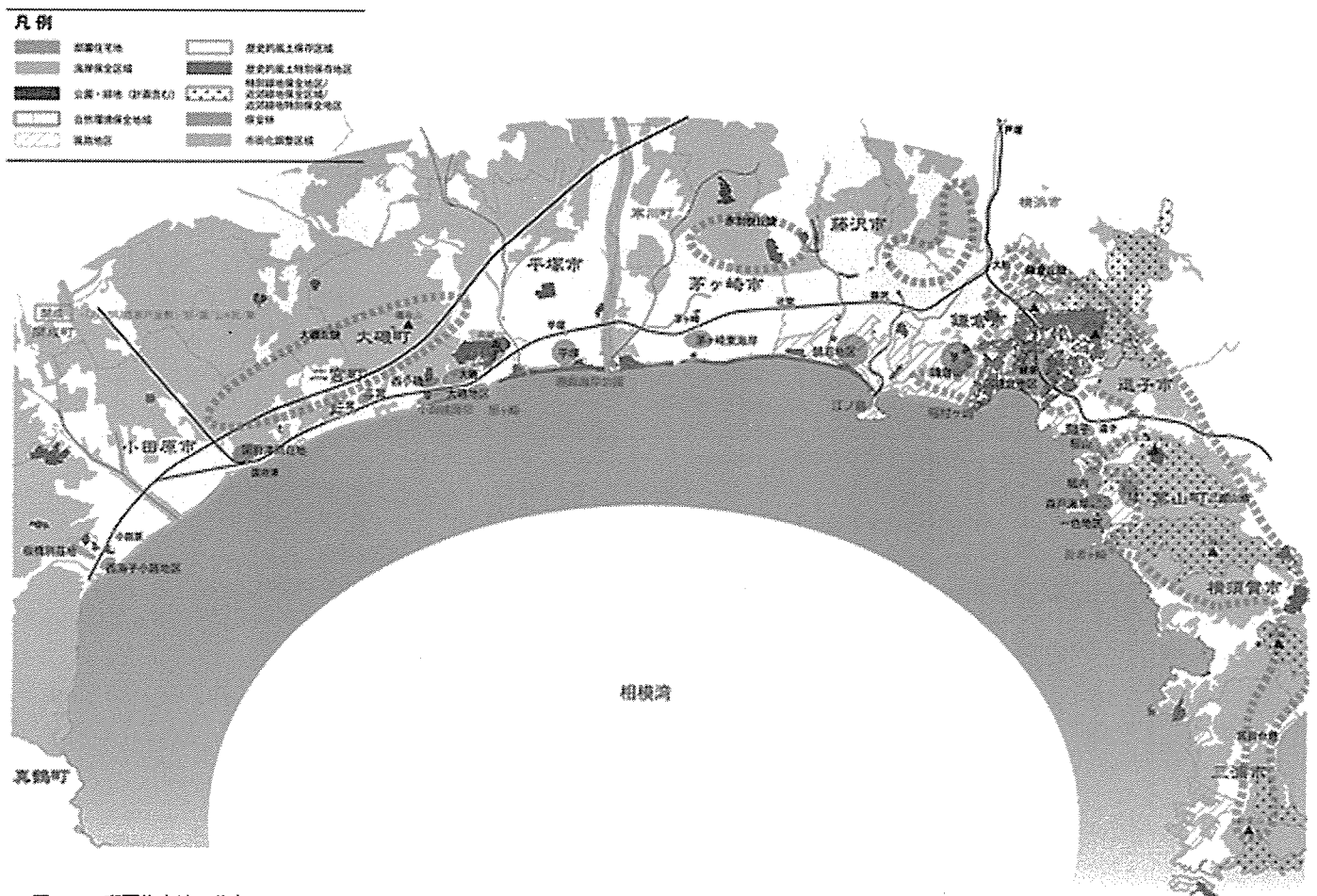


図-4 邸園住宅地の分布

様々な主体の取組み

0. 邸園文化圏再生構想の背景

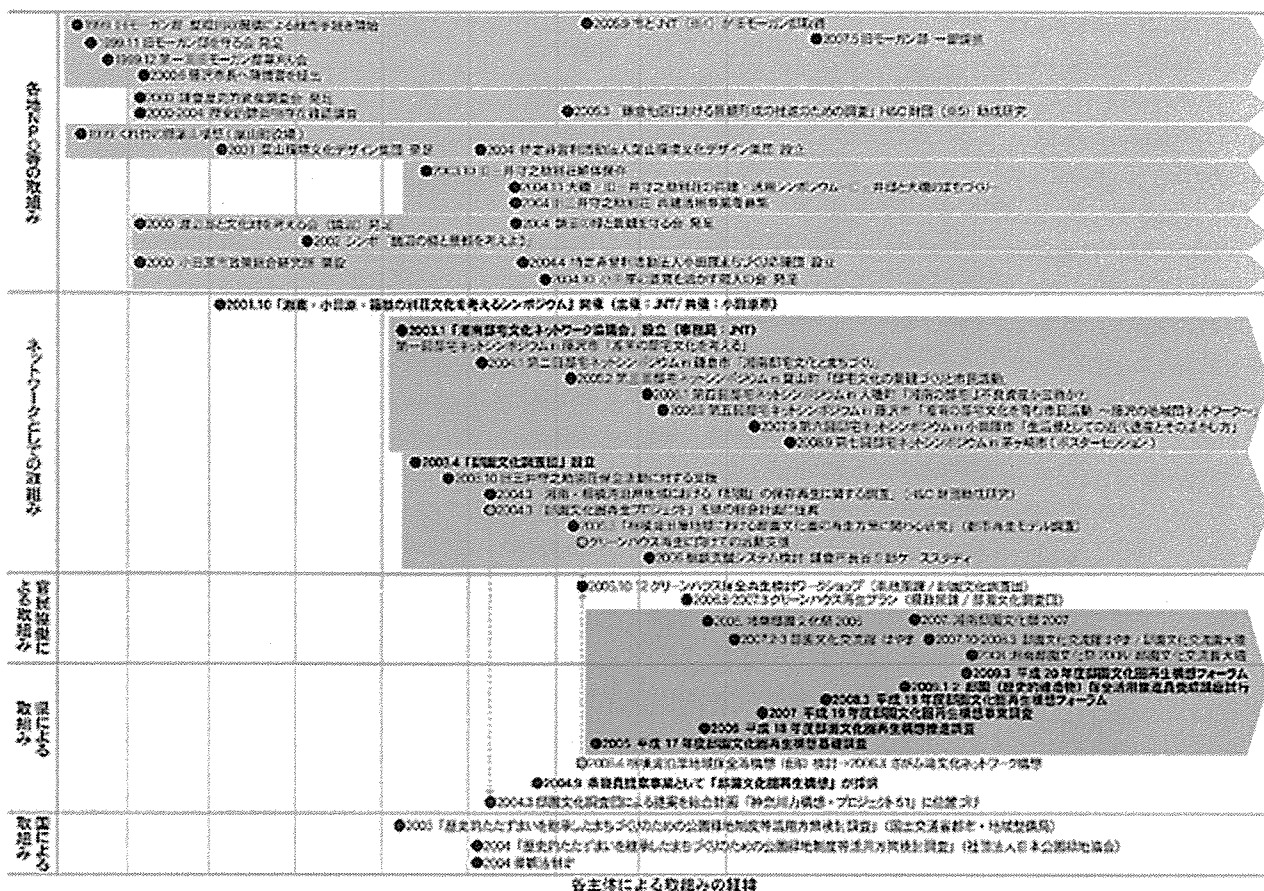


図-5 邸園文化圏再生構想官民協働の取り組み

・そこで、別荘と庭園が一体となった湘南らしい空間を「邸園」と名付け、邸園を下地に形成されてきた生活文化、さらには「邸園に住み続ける、邸園を使い続ける」ことで次世代に価値を継承しながらそこから発信される新しい市民活動・文化創造活動を「邸園文化」として、これらが連なる湘南一帯を「邸園文化圏」と位置づけ、こうした動態的保存を支える社会的システムを構築する地域再生の考え方を提案した。

「邸園文化圏」の考え方は神奈川県を始めとする各方面の共感を呼び、「邸園文化圏再生構想」として神奈川県総合計画の中にも位置づけられ、旧吉田茂邸を始めとして幾つかの邸園が公共団体の手で取得保全される道が付けるとともに、その実験的取組みの一つとして「湘南邸園文化祭 2」が 2006 年より開催されている。これは、湘南各地の市民団体による邸園等を利活用した文化芸術の催しを湘南地域一帯で同時多発的に開催、邸園の存在と価値を地域住民・県民に再認識してもらう広域的なイベントであるが、今年で 4 回を数えるに至って、広く県民の認知と評価をえるようになった。

3. 景観計画

湘南の別荘地の様子をもう少し詳しく見てみると、明治 23 年に有栖川宮別荘、同 27 年に御用邸が造られて以来葉山は官家が多いのに対し、山県有朋が「小湊庵」伊藤博文が「滄浪閣」を建てて以来大磯には政治家の別荘が多い。鎌倉は財界人や文人が多く別荘を構え、逗子には横須賀の海軍士官が、茅ヶ崎には九代目市川團十郎が「孤松庵」を構えて以来役者や画家の別荘が多く建つなど、関係ある者同士が同一地に別荘を構えて一種のサロンを形成し、それぞれの街が特色を持ちながら発展していった



図-6 2009 年湘南邸園文化祭ガイドブック

ことが窺える。

別荘の新住民たちはそれぞれの地域に新しいライフスタイルを持ち込むと同時に、原住民との間に交流と軋轢を生む一種のつぼを形成する中で、新しいコミュニティを生み出しても来た。鎌倉では、別荘族の社交クラブとして「鎌倉倶楽部」が明治41年に生まれているが、大正4年には別荘族と鎌倉地生えの有力者が「鎌倉同人会」を組織し、より積極的に鎌倉町政に参加していこうと活動を始め、その事蹟は名所旧跡の修復・保存、石碑の建立、鎌倉国宝館の建設支援、鎌倉地形図の作成等、現在まで貴重なものとして受け継がれている。こうした動きは、戦後、湘南一帯が東京のベッドタウンとして高学歴の新住民の流入が増すにつれ、地生えの原住民、別荘族や疎開族がそのまま定住化した旧住民、東京の急成長と共に流入してきた新住民が三つ巴の摩擦と交流を繰り返しながらさらに大きな動きとなって、古都保存法制定のきっかけとなった鎌倉「御谷騒動」に象徴されるように、景観や緑の保全など環境に対する市民意識を高く持った市民が育っていった。湘南のリゾート化は現在この地域一帯に住む人々の精神の遺伝子を形成し、各都市のシヴィックプライドの醸成に寄与してきたと考えられる。

こうした市民のスタイルは、景観計画にも影響している。現在、神奈川県内の33自治体のうち、景観行政団体は20、景観計画を策定したのは17に達している。

神奈川県では、昭和60、61年度の2カ年を掛けて「かながわの魅力ある景観づくり基礎調査」を行い、昭和62年に「魅力ある景観づくり指針」を取りまとめ、地域に密着した景観づくりは市町村の役割が重要としつつ、広域的な景観づくりは県の役割とし、建の景観形成の方針、ガイドライン、景観形成計画の手引きを示した。その後、景観形成モデル地区計画策定調査を市町村と協働で行い、景観形成策定マニュアルをまとめた。これに呼応して、大磯町、藤沢市、鎌倉市、小田原市、平塚市など湘南各自治体は景観形成基本計画、ガイドライン、条例(自主)、高度地区等を策定するなど、景観法制定に先駆けた取組みが行われてきた。

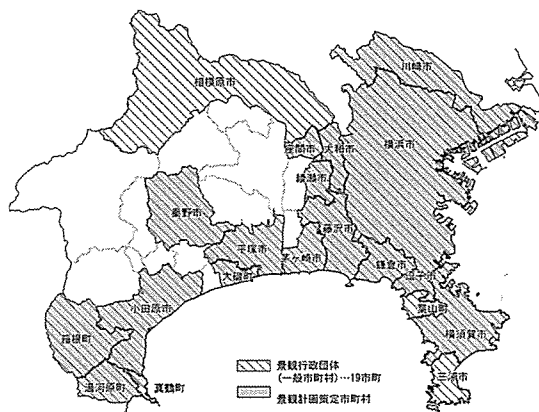


図-6 景観行政団体及び景観計画策定市町村

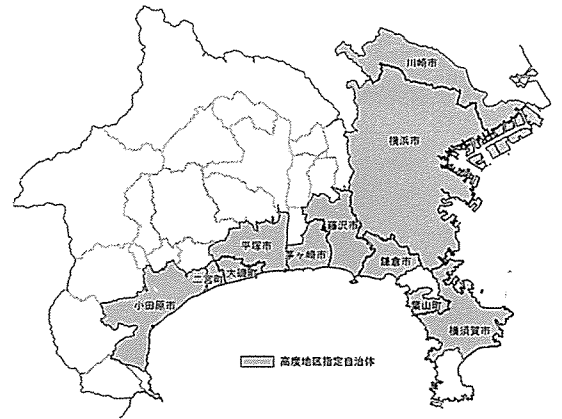


図-7 高度地区指定自治体

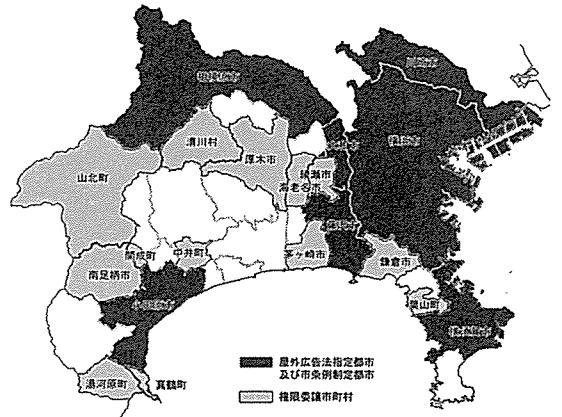


図-8 屋外広告物法指定都市及び市条例制定都市等
(上の図はいずれも平成21年9月現在)

4. 湘南地域のグランドデザインとエリアマネジメント

湘南地域を見てみると、国土軸を形成する幹線道路沿いなどに立地する産業・業務拠点は、湘南の良好な住環境に住む高学歴人材を吸収した研究開発型生産業務機能に転換しつつあり、一方鉄道駅前拠点は彼らの高度な生活文化・嗜好に応える高質な商業サービス機能に衣替えしつつある。湘南地域は首都圏の産業業務ゾーン(ダウンタウンゾーン)に対応するベッドタウンではなく、東京・横浜の強力な磁場を利用しつつ、広域交通幹線沿いの産業軸と、湘南海岸や丘陵ゾーンの住宅・リゾート地が密接に連携して独自の地域を形成しつつある。湘南海岸や丘陵部は京浜・湘南の広域産業軸に働く人々の住まいと子弟の教育の場(アップータウン)であり、その住環境の維持向上が産業ゾーンの高度化・活性化を促進することを忘れてはならない。湘南地域は、アップータウンとしての良好な住宅地であるばかりでなく、文化・リゾート地域として豊かな歴史的景観や自然環境を保全しつつ、保養・文化学習・教育研修・会議集会等、市民や企業人が明日への英気と英知を養う場を整備することが、湘南地域の独自の発展にとっても重要となる。湘南は以前から作家や芸術家が多く住む地域であったが、さらに新しい湘南文化の誕生を予感させる動きとして、近年はこうしたONとOFFの世界が近接している事に利点を

見つけたアーティストや情報・製品開発などのデザイナー達が仕事場兼用の住まい(SOHO)を構え始め、彼らが制作したものを発表したり売ったりするギャラリーやショップも見掛けられるようになってきた。

このように、湘南地域の環境が湘南の産業活動の基盤となり、湘南の産業活動が湘南の環境保全を支える、という相補的な構図をハード・ソフトの両面から描き出すことが湘南の新しいブランドデザインとエリアマネジメントでなければならない。そのマネジメントの一つとして、京浜・湘南の産業活動が生み出す利益が、湘南地域の環境保全に還元される仕組みを考えねばならない。

邸園の保全活用は、良好な住宅資産として使い続けられることだけでなく、市民や企業人が明日への英気と英知を養う文化学習・教育研修・交流の場として、文化・リゾート地域としての発展にとって極めて大切な資産なのである。

5. クリエイティブシティ

今、EU 諸国を中心に世界各地の都市で「クリエイティブシティ（創造都市）」というまちづくりのコンセプトが主張されている。世界が情報化の進展などにより社会や経済がグローバル化する一方で、製造業の衰退、産業の空洞化、財政破綻、地球環境問題の顕在化など大量生産社会の行き詰まりが露呈し、先進国の都市が自立と持続的な発展を維持し

ていくには、芸術や文化が持つ「創造力」を活かして、社会の持つ労働集約的な潜在力を引き出し、生活を楽しむ新しい価値や魅力を高め、発信していくことを模索し始めている。文化芸術の分野に最も顕著に現れる人間の創造力は、身の回りにある不安や困難、さらに環境、平和や共存などグローバルな課題に立ち向かう力となる。文化芸術は市民生活を充実させるばかりでなく、都市の活性化さらには国際的な発信力にとっても大きな効果をもたらすと考え、伝統や創造力に裏打ちされた生活・文化を育て、世界に存在感を示し、諸外国との活発な交流により経済社会の活力を育成する試みが、「クリエイティブシティ」である。国内では横浜、金沢、京都などの都市が取り組みを始めている。

湘南地域一帯は「クリエイティブシティ」を標榜している訳ではないが、良好な都市環境を保全・創出・維持し、優れた文化を発信していくことは、そこに暮らす人々の価値観、気質、DNAなどをベースとした地域独自の「生活スタイル」と密接に関係している。湘南で形成され、今も進行しつつあるライフスタイルは、湘南の街の緑豊かで閑静な低層建築の佇まいや景観があって初めて成立し得たことだと思われる。美しい空間を守ること、創ることを贅沢と評価せず、地域にとって必要不可欠であると合意できる生活文化があってこそ、それらは維持、実現できるし、地域独自の生活文化が花開くともいえる。

ブロック活動報告

都市開発スケールの肥大化について

曾根 幸一

SONE KOICHI

曾根幸一・環境設計研究所

「TDA+JUDI 関東まち歩き」のメモ

2009年6月27日(土) <TDAとJUDI 関東ブロックの合同まち歩き>「築地市場から豊洲・東雲」があった。築地市場の移転は昨今の政治情勢で不明確になりつつあるが、目的は次々と巨大化・高層化していく建築を視察するツアーでもあった。天候に恵まれすぎて暑い一日だったが、最後は豊洲駅周辺の唯一昔からの街区で打ち上げ懇談となった。このメモは最後の懇談で議論してもらおうと用意したものだが昼食時に披露され、おかしな用語を直すべく意見がでたが、内容について特段の異論はでなかった。しかしその数日後私は有明のオリゾンマーレと呼ぶ超高層に住む友人宅に招かれ、周辺地区の異様さに再び驚かされた。そこで、このメモをどこかに収録頂きたいと思っている。

1・埋め立て地や工場跡地には既存のまちと連続する「街区」がない。

「街区のサイズ」は建築のサイズを調整する機能も持っているから、私はこの点を主張しているが、なかなか理解されないでいる。この典型が昨今の国鉄跡地や埋め立て地の街づくりである。

とりわけ広大な埋め立て地には無節操な計画が多い。端的に言って私はこれを都市ビジョンの欠落ではないかと思っている。街区形成の歴史については昭和初期(1930)頃の伊部貞吉氏の論考が有名であり、その実績を持ってわが国の区画整理が遂行されたケースが多いと思われるが、街区とそこに立ち上がる建築(=都市デザイン)の発展との関係について追求している研究者は少ない。その理由を私はコルビュジエなどの近代建築運動が勃興したことによるものだと推測しているが、その話は別の機会に譲るとして、東京は江戸時代の町割と大正・昭和初期の区画整理でできた街区と埋め立て地のように街のイメージがないままできた無節操な街の3つが共存しているのが実情ではなからうか。

2・敷地の巨大化は事業の企画・計画が自由になるという観念が流布している。

街区がない。あるいはあるにはあるが敷地が広いことは建築形態が自由になるという観念があるがこれは景観形成上おかしい。景観形成と街並み形成は同義ではないが、市街地形成と言い換えれば、沿道から遠く離れた超高層の群生がはたして市街地

と呼べるのかどうかイメージが希薄になる。特に昨今の開発は「道路」を事業者負担させているから公共性を担保出来ていない側面があるが、建設事業の巨大化がそのデメリットを上回っていると思われる。では、巨大化がなぜ起こるかと言えば、そこでは事業者とジェネコン、場合によっては建築家の利害が一致するからに他ならない。

一般的に言って、住宅事業は100戸程度以上を対象にしないと、企画、設計、広報宣伝にさける費用が出にくい。で、既成市街地では100戸や300戸程度の開発になる。この程度ならヒューマンなスケールの調整は可能だが——1棟1400戸の超高層とは？

ざっと拝見するところ、この地域周辺の超高層は1辺が45〜50mのものによっては65mにもなっている。これは二面採光を確保するために内部に空洞を持つ結果だ。はたしてこれを超高層の進化と呼ぶのかどうか？

3・埋め立て地には周辺に既住民が不在であり、コンサルの機能が無視されている。

豊洲・東雲周辺には既住民が不在あるいは僅かである。従って巨大化を反対する人間が不在である。周辺に既住民のいる一般市街地では、ヒューマンスケールが住民の体感的な常識となるから日影や通風に対する反対運動も起きやすく、これらを配慮しつつ計画がすすめられるが埋め立て地では事業者、行政、住民の3極構造がくずれているから、行政がよほどしっかりしたビジョンを持たない限り無節操な開発になる。

これを防ぐのはコンサル機能であり、その内容は「街区サイズ」と「開発密度」にあるはずだが、自由経済の中での規制緩和、特に埋め立て地や工場跡地などに対するコンサル機能は無視されている。

4・都市土木と建築の乖離

私は冒頭に昭和初期の伊部貞吉の論文をあげたが、ここでは開発密度とそこに招来する建築形態について諸外国の例をもとに詳細な論考がなされている。にもかかわらずわが国ではいつの間にか街区の形成は土木（都市土木）の仕事で、与えられた敷地からが建築の仕事だという観念が染み付いているから両者は全く乖離している。建築家も基準や規定に追い回される結果「セットバック」という言葉を美德のように思ったり、必要のないはずの街区の「隅きり」を当然のように受け入れているからこうした問題に疑念を差し挟む機会はすくない。この点も根は深いのだが話を別の機会に譲らねばなるまい。

さて、都市の大半が住宅で出来ていることは歴史的事実なのだが、住宅地の開発は200%でも充分密な市街地が形成されることが識者の間では当然視

されて来た。しかし、自由経済の中の規制緩和、400%〜500%などを許容すれば、建築形態の選択肢が「超高層」に限定されてくる。こうした状況の中では超高層を許容しつつ中層と複合し、街並み型の開発を誘導すべきであるが、先に指摘したように街区と建築形態との関係についての考察が甘く、埋め立て地にとっては害こそあれ何の役にも立たない空疎な空き地が目立つばかりである。

5・現在のマンションターゲットは若い人達

この不景気で直近の住宅マーケットは不確かだが、ここでも主たる顧客ターゲットは若い人達にあるのだろう。一流企業の30代後半、年収が700万といったところか？しかし1棟1400戸もあるマンションが何故に人気があるのか？新しい景観？を享受するオタク型人間の増大か？身の回りの街のありようや季節の変化であるよりも、城主のように遠望を楽しむ超高層の住民は上空飛行的で無時間的な感覚の生活を送ると思われるが、それはやむなく需要のマーケットに巻き込まれた結果なのか？高齢者に占拠された内陸部からパラサイトを脱出するにはもうこうした場所しか残されていないのかも知れない。問題は別にもある。

6・巨大開発は建て替えに弱いのではない

この巨大な建築が建て替え時にどうなるかである。埋め立て地では既存市街地以上に災害が予想されるのだから、建て替えも視野に入れるべきだろう。巨大建築の再建には接道・インフラなどの要件が必要になるからいざ建て替えとなると接道ごとに同意が必要になる。しかし巨大なコミュニティとなると全員同意は不可能だ。これは昨今の団地などでみられる苦渋の実態といていい。超高層の床が傾くような事態は予想出来にくいが建て替えは他の理由でも起こりうる。

超高層も団地も広大な街区がそのままコミュニティの単位となるから問題が大きいのだ。現在多くの分譲団地の建て替えで「同意」が得られないでいるのは1団地申請による巨大敷地一括開発の弊害がその一因だと思われる。街の多くは住宅で出来ているが、それは災害には合意のとれる程度に分節され、それぞれのインフラ（ライフライン）を備えていなければなるまい。その主体数が200か300かそれは昨今の建て替え同意化運動の実績から推し量ることが出来るだろう。

■中国ブロック 例会活動報告

長沼 眞智子

NAGANUMA MACHIKO

エル・グレコ

代表幹事

1. 犬島じゃけん、アートじゃが

(訳：犬島だったらやはりアートプロジェクトと
いうことでしょうか)

日時：2009年5月30日31日

場所：犬島、牛窓

参加者数：14名（内訳：中国ブロック11名、関西
ブロック1名、一般2名）

①犬島へ

犬島は、岡山県岡山市東区に属し、岡山水道南東部に浮かぶ島。宝伝港より船で約5分。目の前に見える島だ。“INUJIMA ART PROJEKT”の文字が近づいてくる。

②犬島アートプロジェクト

犬島アートプロジェクトは、犬島の近代化遺産である精錬所に、廃墟というインスピレーションを得た三分一博志の建築プロジェクトと、三分一とコラボレートすることを前提とした柳幸典のアートワークによって成り立っている。それに付随する形で、岡山大学理工学部の提唱する循環型社会を意識したという環境システムが、協働というかたちで、プロジェクトという名の下に定義付けられている。

③福武構想の実現化

福武総一郎は、1909年より10年間の移動によりその使命を終えた犬島の精錬所を使い、彼が構想としてあためていた「ベネッセアートサイト直島」の活動に続くアートワーク、アートプロジェクトを実現化する舞台としてこの場所を選んだのかもしれない。

④犬島に住む人々

この島に住む在本さん宅で夕食をいただき、この島の歴史等、いろいろなお話を聞いた。この島の人口は約100名。島のあちこちには古くからの家並と、いろいろなインスタレーションアートなどが仕掛けの様に見受けられる。何気ない古い納屋のロープの置き場もアートっぽく思えるのは何故？

⑤牛窓の町並み保存

朝食も在本さんのガーデンでいただき、この島を出た。翌日は、牛窓の古くからの町並みを訪ねた。伝建地区には指定されなかったものの、住む人々の努力により、この家屋群は保たれている。

⑥焼き板工房

午後は焼き板工房森材木店で、焼き板ができるまでの工程を見学し、この例会は散会した。

2. 世界遺産宮島・海の宮

日時：平成21年8月8、9日

場所：宮島

参加者数：12名

①まちや通り、昼

町屋通りを歩いた。

海側の厳島神社を臨む土産物屋街から、山側に一本入った通りで「町屋通り」と名づけられている。主に江戸期に形成されたと見られるとおりで、道はそのまま残されていた。店舗と住宅が混在している。出入り口や窓はほとんど修復されていた。利便性のためか、経済的なパフォーマンスを考慮してか、ほとんどの修復は、アルミサッシによってなされていた、廿日市の都市計画課の方も同行していたので、尋ねた。「建築的な指導について」どの程度までの指導なのか。サッシについては、色彩を茶、または濃いグレーとしているとのこと。倉敷で、本来の木製の格子戸を見慣れている私の目では違和感を覚えた。外部の腰板の部分には瓦を部分的に重ねながら、貼り付けてあるところもあり、歴史的な検証がなされた上でのことなのかはわからない。

喫茶店に入った。オーナー御夫妻と話をした。先人より引き継いだ建築物を利用した店舗。地元以外の資本による世俗的な商業施設の流入を憂えていた。人々の努力によりこの町並みは保たれている。

②厳島神社、参道

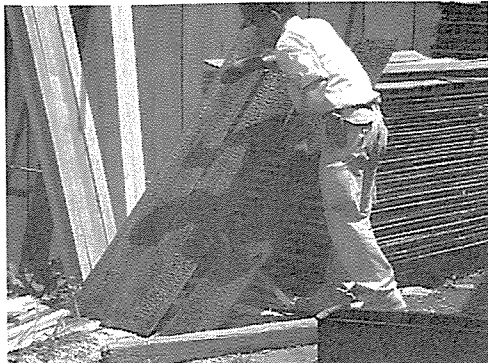
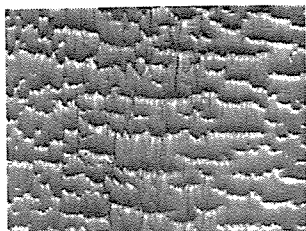
「平家物語」の舞台ともなった厳島神社は古代より、海の宮のひとつとして祭られていたが、平清盛によって、現在の本殿が建立されたとされている。江戸時代に入って、神社仏閣参拝を旨とした空前の観光ブームにより、参道は、整えられていった。同時に、神社関連の職を生業とする人々たちにより、町や通りは作られてゆく。魚屋、桶や、文具店、紙や宿屋、酒屋、など。

③まちを紡ぐ人たち

町並みを案内していただいた宿のオーナーの菊川氏も、喫茶店の宮郷御夫妻、八十歳の文具店看板娘のももちゃん、いつもやの菊池さん、

④夜

参道と神社はライトアップされている。赤の鳥居が海の中に浮かんでいる。幻想的な美しい景観だ。



■お知らせ

堀口 浩司

HORIGUCHI KOJI

地域計画建築研究所

20周年記念事業特別委員会
委員長

20周年記念事業のテーマが決まりました。

「しあわせな風景 × デザイン JAPAN」

20周年記念事業のテーマについては、会員の皆様にも公募し、会員あるいは各ブロックから9編の提案これまで会員の皆様に公募し、9名の方から提案をいただきました。「アジアの中の日本」「地域主権時代」「日本の美」「持続可能」「美しい都市は幸せ」「低炭素化社会」「環境」「きれいなまち」「風景をもつ都市」などの貴重なキーワードを得ることができました。ありがとうございました。

こうした提案を元に、特別委員会と代表幹事会で議論を行いました。代表的な意見を紹介すると、
・記念イベントのための一過性のキャッチフレーズではなく、これからの都市環境デザインの方
向を示す言葉としたい。
・社会に対するメッセージ性のある言葉で表現したい。

- ・「地域の個性」「日本らしいデザイン」「西洋からアジア」といった新しい展望を示したい。
- ・表層的なデザインや場所づくりにとどまらず、「景観から情景へ」「つくるデザインから維持するデザイン」など心象風景に訴えるような言葉を求めたい。
- ・「ひとり一人の異なるイメージがふくらむ」ようなものにしたい。

そのような言葉として「ふるさとの風景 × デザイン JAPAN」としました。なお、テーマのロゴなどのデザインは今後検討する予定です。
今後、20周年を記念する事業について各ブロック・委員会で更にイメージを展開して頂きたいと存じます。

都市環境デザイン会議20周年記念事業特別委員会
伊藤 登、作山 康、高見 公雄、堀口 浩司、
埴 正浩

事務局より

1. 新会員の紹介

2009年6月～8月の入会者は下記の通りです。(入会順、敬称略)

8月31日現在の会員数は、405名です。

会員氏名	勤務先(ブロック)
安宅 恵	(株)国土開発センター (北陸)
内田奈芳美	金沢工業大学 (北陸)
村田 一也	石川工業高等専門学校 (北陸)
須田 武憲	(株)GK設計 (関東)
伊良部一史	(株)国建 (琉球)
小早谷信之	(株)アーテック (関東)

準会員氏名	勤務先・学校(ブロック)
藤原 京子	(株)ヘッズ (関西)
鳥越友香里	金沢工業大学4年 (北陸)

2. 退会者 (2009年6～8月)

石田聖次、大山峰夫、奥史子、小松孝、阪井暖子、
七字祐介、田中寿明、細谷恒夫 (敬称略)

3. 住所変更等 (敬称略)

氏名	変更内容(新)
飯村 博	(株)アイシーエム企画 〒151-0072 渋谷区幡ヶ谷1-7-4 深津ビル2F Tel&FAXは変更なし
石嶺 一	(株)国建 都市計画室 〒900-0015 那覇市久茂地1-2-20 OTV国和プラザ9F Tel. 098-864-5638 FAX. 862-8849
尾辻 信宣	G計画デザイン研究所 〒813-0043 福岡市東区名島1-28-21 -404 Tel&FAX. 092-215-2744
久保 光弘	(株)久保都市計画事務所 〒557-0012 大阪市西成区聖天下 2-2-2 Tel&FAX. 06-6651-8075
南條 道昌	(株)都市計画設計研究所 〒162-0825 新宿区神楽坂6-67 神楽坂FNビル2F Tel. 03-3267-1961 FAX. 3267-1964
西海 哲哉	(株)日建設計 都市デザイン室 〒102-8117 千代田区飯田橋2-18-3 Tel. 03-5226-3030
藤井 美成	ナチュラルコンサルタント(株) 〒921-8813 石川県石川郡野々市町 住吉町12-27 Tel. 076-246-1171 FAX. 246-4489

広報委員会

白濱 力	土田 旭
松村みち子	加茂みどり
菅 孝能	岸田 文夫
中嶋 猛夫	松山 茂
櫻井 淳	横山あおい
吉田 慎悟	島 博司
服部 圭郎	横山 裕
作山 康	